

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	研究科の専攻の設置									
フリガナ設置者	コリツカクイダクワシヨウ オサカキョウイクダクイ 国立大学法人 大阪教育大学									
フリガナ大学の名称	オサカキョウイクダクイダクワシヨウ 大阪教育大学大学院（The Graduate School of Osaka Kyoiku）									
大学本部の位置	大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1号									
大学の目的	大阪教育大学大学院は、学部における一般的及び専門的教養の基礎の上に、広い視野に立って精深な学識を修め、専門分野における理論と応用の研究能力及び教育実践の場における教育研究の推進者としての能力を養成することを目的とする。									
新設学部等の目的	高度教育支援開発専攻では、新時代の学校改革や多様化した教育課題解決の一翼を担う専門職業人の養成及び高度化を目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	14条特例の実施	
	教育学研究科 [Graduate School of Education] 高度教育支援開発専攻 [School of Advanced Professional Collaboration in Education]	年	人	年次人	人	修士（教育学） 【Master of Education】	令和3年4月 第1年次	大阪府柏原市旭ヶ丘 4丁目698番1号		
	計	2	50	—	100					
同一設置者内における変更状況 （定員の移行、名称の変更等）	教育学研究科 国際文化専攻〔廃止〕 (△12) 総合基礎科学専攻〔廃止〕 (△16) 芸術文化専攻〔廃止〕 (△12) 健康科学専攻（夜間）〔廃止〕 (△21) ※令和3年4月学生募集停止									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	教育学研究科 高度教育支援開発専攻	講義	演習	実験・実習	計	30単位				
		46科目	83科目	8科目	137科目					
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
				教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	教育学研究科 高度教育支援開発専攻		人	人	人	人	人	人	人
				40 (40)	25 (25)	— (—)	— (—)	65 (65)	— (—)	27 (27)
		計		40 (40)	25 (25)	— (—)	— (—)	65 (65)	— (—)	— (—)
既設分	連合教職実践研究科 高度教職開発専攻		38 (38)	14 (14)	3 (3)	— (—)	55 (55)	— (—)	123 (123)	
		計		38 (38)	14 (14)	3 (3)	— (—)	55 (55)	— (—)	
	合計		78 (78)	39 (39)	3 (3)	— (—)	120 (120)	— (—)	— (—)	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		143 人 (143)	19 人 (19)	162 人 (162)					
	技 術 職 員		6 (6)	— (—)	6 (6)					
	図 書 館 専 門 職 員		9 (9)	4 (4)	13 (13)					
	そ の 他 の 職 員		— (—)	— (—)	— (—)					
	計		158 (158)	23 (23)	181 (181)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	借用面積： 2,409 m ² 借用期間：1 年 (毎年更新)				
	校 舎 敷 地	229,161 m ²	0 m ²	0 m ²	229,161 m ²					
	運 動 場 用 地	107,723 m ²	0 m ²	0 m ²	107,723 m ²					
	小 計	336,884 m ²	0 m ²	0 m ²	336,884 m ²					
	そ の 他	380,238 m ²	0 m ²	0 m ²	380,238 m ²					
	合 計	717,122 m ²	0 m ²	0 m ²	717,122 m ²					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
		78,470 m ² (78,470 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)	78,470 m ² (78,470 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	118室	46室	111室	9室 (補助職員 人)	4室 (補助職員 人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数		大学全体				
		教育学研究科 高度教育支援開発専攻		65室 (共同利用8室含む)						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体		
		教育学研究科 高度教育支援開発 専攻	923,374 [188,601] (923,374 [188,601])	18,700 [3,425] (18,700 [3,425])	4,005 [4,004] (4,005 [4,004])	19,787 (19,787)	0 (0)		0 (0)	
	計	923,374 [188,601] (923,374 [188,601])	18,700 [3,425] (18,700 [3,425])	4,005 [4,004] (4,005 [4,004])	19,787 (19,787)	0 (0)	0 (0)			
図 書 館		面 積		閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数			大学全体		
		8,335m ²		855	1,500,700					
体 育 館		面 積		体育館以外のスポーツ施設の概要					大学全体	
		7,629m ²		野球場		テニスコート (オムニ8面、クレール7面)				
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による
		教員1人当り研究費等	—	—	—	—	—	—	—	
		共同研究費等	—	—	—	—	—	—	—	
		図 書 購 入 費	—	—	—	—	—	—	—	
	設 備 購 入 費	—	—	—	—	—	—	—		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			—							

既設大学等の状況	大学の名称		国立大学法人 大阪教育大学						所在地
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	
		年	人	年次人	人		倍		大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1号 (※の課程及び専攻) 大阪市天王寺区南河堀町4番88号
	教育学部								
	初等教育教員養成課程(昼間)	4	60	—	240	学士(教育学)	1.02	平成29年度	※3年次より
	初等教育教員養成課程(夜間)	5	40	3年次25	210	学士(教育学)	1.02	平成29年度	※
	学校教育教員養成課程	4	420	—	1,680	学士(教育学)	1.03	平成22年度	平成29年度入学定員増(25人)
	養護教諭養成課程	4	30	—	120	学士(教育学)	0.98	昭和51年度	
	教育協働学科	4	350	—	1,400	学士(教育学)	1.01	平成29年度	
	幼稚園教員養成課程	4	—	—	—	学士(教育学)	—	昭和42年度	平成29年度より学生募集停止
	特別支援教育教員養成課程	4	—	—	—	学士(教育学)	—	昭和63年度	平成29年度より学生募集停止
	教養学科	4	—	—	—	学士(教養)	—	昭和63年度	平成29年度より学生募集停止
	第二部小学校教員養成課程	5	—	—	—	学士(教育学)	—	昭和48年度	平成29年度より学生募集停止
	第二部小学校教員養成課程[3年次編入]	—	—	—	—	学士(教育学)	—	—	令和元年度より学生募集停止
	教育学研究科								
	学校教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	国語教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	社会科教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	数学教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	理科教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	英語教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和43年度	令和元年度より学生募集停止
	家政教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和49年度	令和元年度より学生募集停止
	音楽教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和50年度	令和元年度より学生募集停止
	美術教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和50年度	令和元年度より学生募集停止
	保健体育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和50年度	令和元年度より学生募集停止
	特別支援教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和51年度	令和元年度より学生募集停止
	技術教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	平成5年度	令和元年度より学生募集停止
	養護教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	平成14年度	令和元年度より学生募集停止
	実践学校教育専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	平成8年度	令和元年度より学生募集停止
	健康科学専攻	2	—	—	—	修士(学術)	—	平成5年度	令和3年度より学生募集停止
	総合基礎科学専攻	2	—	—	—	修士(学術)	—	平成5年度	令和3年度より学生募集停止
	国際文化専攻	2	—	—	—	修士(学術)	—	平成6年度	令和3年度より学生募集停止
	芸術文化専攻	2	—	—	—	修士(芸術)	—	平成7年度	令和3年度より学生募集停止
	連合教職実践研究科								
	高度教職開発専攻	2	150	—	300	教職修士(専門職)	0.73	令和元年度	※柏原及び天王寺
附属施設の概要	附属学校・別紙のとおり								

様式第2号（その1の1）別紙 附属施設の概要

（大阪教育大学大学院教育学研究科高度教育支援開発専攻）

名称	目的	所在地	設置年月	規模等		
				土地	建物	
附属天王寺小学校	<p>教育基本法（昭和22年法律第25号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）に基づいて、それぞれ学校教育を行う、学部・大学院等における児童、生徒又は幼児の教育又は保育に関する研究教育に協力し、学生の教育実習の実施に当たる。</p>	大阪府大阪市阿倍野区松崎町1-2-45	昭和26年4月	11,735㎡	6,086㎡	
附属池田小学校		大阪府池田市緑丘1-5-1	昭和26年4月	25,464㎡	8,813㎡	
附属平野小学校		大阪府大阪市平野区流町1-6-41	昭和26年4月	28,028㎡	6,346㎡	
附属天王寺中学校		大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88	昭和26年4月	(天王寺キャンパスを含む)	12,492㎡	
附属高等学校（天王寺校舎）			昭和31年4月			
附属池田中学校		大阪府池田市緑丘1-5-1	昭和26年4月	昭和31年4月	53,101㎡	14,466㎡
附属高等学校（池田校舎）						
附属幼稚園		大阪府大阪市平野区流町2-1-24	昭和26年4月	昭和26年4月	31,938㎡	1,816㎡
附属平野中学校						
附属高等学校（平野校舎）						
附属特別支援学校	大阪府大阪市平野区喜連4-8-71	昭和41年4月	昭和41年4月	10,357㎡	3,574㎡	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(教育学研究科 高度教育支援開発専攻)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	教育イノベーション概論	1前	2			○			1						集中 ※演習、集中、オムニバス ※演習、集中、オムニバス・共同（一部）	
	現代社会の動向と教育協働	1前	2			○			2	1						
	現代的教育研究方法演習	1後	2			○			1	2						
	小計（3科目）	—	6	0	0	—	—	—	4	3	0	0	0	0		
心理・教育支援コース科目	心理支援に関する科目	保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1		○			1					※演習	
		保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○		1					※講義	
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1後		1		○			1					※演習	
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1後		1			○		1					※講義	
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1			○		1					※講義	
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○		1						
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1前・後		2			○							兼1	※演習、隔年
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1			○		1						※講義、隔年
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○		1						※講義、隔年
		心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅰ	2前		1			○		1						※講義
		心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅱ	2前		1			○		1						※講義
		心理支援に関する理論と実践	2前		2			○		2	3					※演習、オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践Ⅰ	1後		1			○		1						※演習、隔年
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践Ⅱ	1後		1				○	1						隔年
		心の健康教育に関する理論と実践Ⅰ	1後		1			○		1						※演習、隔年
		心の健康教育に関する理論と実践Ⅱ	1後		1				○	1	1					※講義、隔年
		公認心理師と教師の協働的援助	1前・後		2				○						兼3	※講義、オムニバス
		実習科目	心理実践実習ⅠB	1通		2				○	2	3				
	心理実践実習ⅠC		1前		1				○	2	3					共同
	心理実践実習ⅠD		1後		1				○	2	3					共同
	心理実践実習ⅡA		2通		3				○	2	3					集中
	心理実践実習ⅡB		2通		3				○	2	3					集中
	心理実践実習ⅡC		2前		1				○	2	3					共同
	心理実践実習ⅡD		2後		1				○	2	3					共同
	フィールド研究科目	心理実践実習ⅠA	1通		3				○	2	3					集中
小計（25科目）		—	0	35	0	—	—	—	3	3	0	0	0	兼4	—	
国際協働教育コース科目	コース共通科目	JSLカリキュラムの理論と実践	1前		2			○							兼1	
		国際関係論	1後		2			○			1					
		国際比較文化論	1後		2				○	1						
	日本型教育システム開発領域専門科目	日本型教育システムにおけるICT活用の方法	1後		2				○						兼1	※講義
		日本型教育システムの諸相	1前		2			○							兼9	オムニバス
		日本における教科の内容と指導法（数学）	1前		2			○							兼1	
		日本における教科の内容と指導法（理科）	1前		2			○							兼1	
		日本型教材の開発と授業デザイン（数学）	1後		2			○							兼2	オムニバス
		日本型教材の開発と授業デザイン（理科）	1後		2			○							兼1	
		和算に学ぶ日本型数学教育	2前		2			○		1						
		生涯学習としての数理科学	1前		2			○		1						
		生涯学習としての情報科学	1前		2			○		1	1					オムニバス
		生涯学習としての自然科学（物理・化学分野）	1前		2			○		3	1					オムニバス
		生涯学習としての自然科学（生命・地学分野）	1前		2			○		3						オムニバス
		数学科教材論	2前		2			○		1					兼1	オムニバス
		理科教材論	2前		2				○						兼1	
		数理科学教育特論	2前		2			○		4						オムニバス
		情報科学教育特論	2前		2			○		2	1					オムニバス
自然科学教育特論（物理・化学分野）	2前		2			○		3	2					オムニバス		

		自然科学教育特論（生命・地学分野）	2前		2		○		1	2					オムニバス・共同（一部）		
		数理学教育特論演習	2後		2		○		4						オムニバス		
		情報科学教育特論演習	2後		2		○		2	1					オムニバス		
		自然科学教育特論演習（物理・化学分野）	2後		2		○		2	3					オムニバス		
		自然科学教育特論演習（生命・地学分野）	2後		2		○		2	2					オムニバス・共同（一部）		
日本語教育支援高度化領域専門科目	高度化科目	日本語教育の理論と実践	1前		2		○			1					兼1 オムニバス・共同（一部）		
		社会言語学特論	1後		2		○			1							
		日本語構造論	1後		2		○				1					※講義	
	対照科目	外国語と日本語の対照研究Ⅰ（英語）	1前		2		○		1								
		外国語と日本語の対照研究Ⅱ（中国語）	1前		2		○				1						
		外国語と日本語の対照研究Ⅲ（仏語）	1前		2		○				1						
		外国語と日本語の対照研究Ⅳ（独語）	1前		2		○		1								
	教科理解高度化科目	分野教育	現代文教育の理論と実践	1後		2		○		1							
			古文教育の理論と実践	1後		2		○		1							
			漢文教育の理論と実践	1後		2		○		1							※講義
		社会分野	現代社会教育の理論と実践	1後		2		○		1							
			歴史教育の理論と実践	1後		2		○		1							
			芸術分野	芸術文化教育の理論と実践	1後		2		○		1						
	音楽分野	音楽文化教育の理論と実践	1後		2		○		1								
		英分語野教	英米言語文化教育の理論と実践	1後		2		○			1					※講義	
	多文化理解高度化プログラム	日本語学	日本語学実践演習	2前		2		○			1						
			日本近代文学実践演習	2前		2		○		1							
		ヨーロッパ学	日本古典文学実践演習	2前		2		○		1							※講義
			ヨーロッパ芸術文化実践演習	2前		2		○		1							
		ヨーロッパ言語文化	ヨーロッパ言語文化実践演習A	2前		2		○		1							
ヨーロッパ言語文化実践演習B			2前		2		○			1							
アジア文化		国際音楽文化実践演習	2前		2		○		1								
		日中近代言語文化実践演習	2前		2		○			1							
国際言語文化		日中古典言語文化実践演習	2前		2		○		1								
		国際知識文化実践演習	2前		2		○		1								
国際社会文化		国際現代社会文化実践演習	2前		2		○		1								
		国際歴史文化実践演習	2前		2		○		1								
英語学		日英翻訳論実践演習	2前		2		○			1							
		国際関係史実践演習	2前		2		○			1							
自然言語処理	自然言語処理実践演習	2前		2		○			1								
	国際協働教育実践演習	1前		2		○		21	12					兼1 集中			
フィールド研究科目	日本型教育システム開発実践演習	2前		2		○		11	6						集中		
	日本語教育支援実践演習	2前		2		○		10	6					兼1 集中			
		小計（58科目）	—	0	116	0	—	23	12	0	0	0	0	兼16	—		
教育フアシリティーションコース	コース共通科目	社会に開かれた教育課程の実践研究	1前		2		○								兼1 ※演習		
		学習支援特論	1後		2		○		1						兼1 ※演習		
	教育領域専門科目	教育ポートフォリオとデータ	1前		2		○								兼1		
		学修評価とデータ	1後		2		○								兼1		
		メディア・情報リテラシー特論	1後		2		○								兼1		
		人工知能概論	1後		2		○		1						兼1 ※演習		
		データ分析のためのプログラミング	1後		2		○			1							
		データ解析のための数学概論	1前		2		○		5		1						
		先端技術・データ活用演習	1後		2		○			1							
		先端技術の教育展開と教育データ分析演習	1後		2		○		1							オムニバス	

科目	地域教育・芸術支援人材高度化領域専門科目	生涯学習推進行政の動向	1後	2		○		1							※演習	
		生涯学習施設・職員特論	1前	2			○		1	1					※講義	
		地域教育とキャリア形成	1後	2			○		1						※講義	
		地域教育実践演習	2前	2			○		1							
		識字・成人基礎教育実践研究	1後	2			○							兼1	※演習	
		地域音楽教育支援研究	2前	2				○	3	1					オムニバス・共同	
		地域美術教育支援研究	2前	2				○		3					オムニバス	
		音楽教育支援力高度化演習A	1前	2				○		1						
		音楽教育支援力高度化演習B	1前	2				○		1	1					
		音楽教育支援力高度化演習C	1前	2				○	1							
		音楽教育支援力高度化演習D	1前	2				○	1							
		音楽教育支援力高度化演習E	1前	2				○	1							
		音楽教育支援力高度化演習F	1前	2				○	1							
		音楽教育支援力高度化演習G	1前	2				○	1							
		美術教育支援力高度化演習	1後	4				○			3					オムニバス
		健康・安全教育高度化領域専門科目	地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅰ	1前	2			○		1						
			地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅱ	1前	2			○		1						※演習
			地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅲ	1前	2			○			1					※演習
	地域・学校における生活環境学教育の理論と方法Ⅰ		1前	2			○		1						※演習	
	地域・学校における生活環境学教育の理論と方法Ⅱ		1前	2			○			1					※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅰ		1前	2			○		1						※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅱ		1前	2			○			1					※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅲ		1前	2			○			1					※演習	
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅰ		1前	2			○		1							
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅱ		1前	2			○		1							
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅲ		1前	2			○		1							
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅰ		1後	2				○	1						※講義	
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅱ		1後	2				○	1						※講義	
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅲ		1後	2				○		1					※講義	
	生活環境学の課題解決のための実践研究Ⅰ		1後	2				○	1		1				※講義	
	生活環境学の課題解決のための実践研究Ⅱ		1後	2				○		1					※講義	
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅰ		1後	2				○	1						※講義	
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅱ		1後	2				○		1					※講義	
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅲ		1後	2				○		1					※講義	
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅰ		1後	2				○	1						※講義	
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅱ	1後	2				○	1						※講義		
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅲ	1後	2				○	1						※講義		
	プロジェクトベース科目	プロジェクト演習A	1前	2			○		22	11				兼1	オムニバス・共同	
		プロジェクト演習B	1後	2			○		22	11				兼3	オムニバス・共同	
		小計(49科目)	—	0	100	0	—		22	11	0	0	0	兼7	—	
	課題研究科目	課題研究Ⅰ	2前	2				○	40	25	0	0	0			
		課題研究Ⅱ	2後	2				○	40	25	0	0	0			
		小計(2科目)	—	4	0	0	—		40	25	0	0	0	0	—	
	合計(137科目)		—	10	251	0	—		40	25	0	0	0	兼27	—	
	学位又は称号		修士(教育学)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係								

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p>【修了要件】 大学院研究科に2年以上（長期履修学生にあつては3年以上）在学し、心理・教育支援コース及び教育ファシリテーションコースは所定の30単位以上、国際協働教育コースは所定の34単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文の審査及び最終試験に合格すること。</p> <p>【履修方法】 [専攻共通科目] 専攻共通科目の授業科目3科目6単位を必修とする。</p> <p>[コース共通科目] 選択するコース共通科目のうち、国際協働教育コースを選択する者は、選択必修2科目4単位以上を、教育ファシリテーションコースを選択する者は、必修2科目4単位を履修する。</p> <p>[コース・領域専門科目] ○心理・教育支援コース 選択するコース専門科目のうち、「保健医療分野に関する理論と支援の展開 I」「福祉分野に関する理論と支援の展開 I」「教育分野に関する理論と支援の展開 I」の3科目3単位を必修とし、選択するコース専門科目からその他14単位以上の計17単位以上を履修する。</p> <p>○国際協働教育コース (日本型教育システム開発領域) 選択する領域専門科目のうち、「日本型教育システムにおけるICT活用の方法」「日本型教育システムの諸相」の2科目4単位を必修とし、「数理科学教育特論」「情報科学教育特論」「自然科学教育特論(物理・化学分野)」「自然科学教育特論(生命・地学分野)」から選択必修1科目2単位、「数理科学教育特論演習」「情報科学教育特論演習」「自然科学教育特論演習(物理・化学分野)」「自然科学教育特論演習(生命・地学分野)」から選択必修1科目2単位を含み、計16単位以上を履修する。</p> <p>(日本語教育支援高度化領域) 選択する領域専門科目区分のうち、「日本語教育理解高度化科目」から必修3科目6単位、「対照言語学理解高度化科目」から選択必修1科目2単位以上、「教科理解高度化科目」から選択必修1科目2単位以上、「多文化理解高度化プログラム」からいずれかのプログラム選択必修3科目6単位以上の計16単位以上を履修する。</p> <p>○教育ファシリテーションコース (教育イノベーション開発領域) 選択する領域専門科目のうち、「先端技術・データ活用演習」「先端技術の教育展開と教育データ分析演習」の2科目4単位を必修とし、計12単位以上を履修する。</p> <p>(地域教育・芸術支援人材高度化領域) 選択する領域専門科目から8単位以上を選択必修とし、選択する領域専門科目又は教育ファシリテーションコースその他領域専門科目から2科目4単位以上の計12単位以上を履修する。</p> <p>(健康・安全教育高度化領域) 選択する領域専門科目のうち、「地域・学校における健康科学教育の理論と方法 I/II/III」「地域・学校における生活環境学教育の理論と方法 I/II」「地域・学校における安全教育の理論と方法 I/II/III」「地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法 I/II/III」から選択必修3科目6単位、「健康科学の課題解決のための実践研究 I/II/III」「生活環境学の課題解決のための実践研究 I/II」「安全教育学の課題解決のための実践研究 I/II/III」「スポーツ実践の課題解決のための実践研究 I/II/III」から選択必修2科目4単位、教育ファシリテーションコースその他領域専門科目から1科目2単位以上の計12単位以上を履修する。</p> <p>[フィールド研究科目] 心理・教育支援コースまたは国際協働教育コースを選択する者を対象とし、心理・教育支援コースを選択する者は「心理実践実習 IA」の1科目3単位を、国際協働教育コースを選択する者は「国際協働教育実践演習」と選択する領域の実践演習の2科目4単位を必修とする。</p> <p>[プロジェクトベース科目] 教育ファシリテーションコースを選択する者を対象とし、「プロジェクト演習A」「プロジェクト演習B」の2科目4単位を必修とする。</p> <p>[課題研究科目] 課題研究科目の授業科目2科目4単位を必修とする。</p>	1 学年の学期区分	2学期
	1 学期の授業期間	15週
	1 時限の授業時間	90分

教育課程等の概要																	
(教育学研究科 高度教育支援開発専攻)																	
柏原キャンパス																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
心理・教育支援コース科目	心理支援に関する科目	保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1		○				1					※演習	
		保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○			1					※講義	
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1後		1		○				1					※演習	
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1後		1			○			1					※講義	
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1			○			1					※講義	
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○			1					※講義	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	1前・後		2			○								兼1	※演習、隔年
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	1前		1			○			1						※講義、隔年
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	1前		1			○			1						※講義、隔年
		心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅰ	2前		1				○		1						※講義
		心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅱ	2前		1				○		1						※講義
		心理支援に関する理論と実践	2前		2			○			2	3					※演習、オムニバス
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践Ⅰ	1後		1			○			1						※演習、隔年
		家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践Ⅱ	1後		1				○		1						隔年
		心の健康教育に関する理論と実践Ⅰ	1後		1			○			1						※演習、隔年
	心の健康教育に関する理論と実践Ⅱ	1後		1				○			1					※講義、隔年	
	公認心理師と教師の協働的援助	1前・後		2				○							兼3	※講義、オムニバス	
	実習科目	心理実践実習ⅠB	1通		2				○		2	3					集中
		心理実践実習ⅠC	1前		1				○		2	3					共同
		心理実践実習ⅠD	1後		1				○		2	3					共同
心理実践実習ⅡA		2通		3				○		2	3					集中	
心理実践実習ⅡB		2通		3				○		2	3					集中	
心理実践実習ⅡC		2前		1				○		2	3					共同	
心理実践実習ⅡD		2後		1				○		2	3					共同	
心理実践実習ⅠA		1通		3				○		2	3					集中	
フィールド研究科目	心理実践実習ⅠA	1通		3				○		2	3					集中	
小計（25科目）		—	0	35	0		—			3	3	0	0	0	兼4	—	
国際協働教育コース科目	コース共通科目	JSLカリキュラムの理論と実践	1前		2			○								兼1	
		国際関係論	1後		2			○			1						
		国際比較文化論	1後		2				○		1						
	日本型教育システム開発領域専門科目	日本型教育システムにおけるICT活用の方法	1後		2				○							兼1	※講義
		日本型教育システムの諸相	1前		2			○							兼9	オムニバス	
		日本における教科の内容と指導法（数学）	1前		2			○							兼1		
		日本における教科の内容と指導法（理科）	1前		2			○							兼1		
		日本型教材の開発と授業デザイン（数学）	1後		2			○							兼2	オムニバス	
		日本型教材の開発と授業デザイン（理科）	1後		2			○							兼1		
		和算に学ぶ日本型数学教育	2前		2			○			1						
		生涯学習としての数理科学	1前		2			○			1						
		生涯学習としての情報科学	1前		2			○			1	1					オムニバス
		生涯学習としての自然科学（物理・化学分野）	1前		2			○			3	1					オムニバス
		生涯学習としての自然科学（生命・地学分野）	1前		2			○			3						オムニバス
		数学科教材論	2前		2			○			1					兼1	オムニバス
		理科教材論	2前		2				○							兼1	
		数理科学教育特論	2前		2			○			4						オムニバス
		情報科学教育特論	2前		2			○			2	1					オムニバス
		自然科学教育特論（物理・化学分野）	2前		2			○			3	2					オムニバス
		自然科学教育特論（生命・地学分野）	2前		2			○			1	2					オムニバス・共同（一部）
数理科学教育特論演習	2後		2				○		4						オムニバス		
情報科学教育特論演習	2後		2				○		2	1					オムニバス		
自然科学教育特論演習（物理・化学分野）	2後		2				○		2	3					オムニバス		
自然科学教育特論演習（生命・地学分野）	2後		2				○		2	2					オムニバス・共同（一部）		

日本語教育支援高度化領域専門科目	高度化科目	日本語教育の理論と実践	1前	2		○	1				兼1	オムニバス・共同 (一部)		
		社会言語学特論	1後	2		○	1							
		日本語構造論	1後	2		○	1						※講義	
		外国語と日本語の対照研究Ⅰ (英語)	1前	2		○	1							
	理解高度科目	外国語と日本語の対照研究Ⅱ (中国語)	1前	2		○	1							
		外国語と日本語の対照研究Ⅲ (仏語)	1前	2		○	1							
		外国語と日本語の対照研究Ⅳ (独語)	1前	2		○	1							
		現代文教育の理論と実践	1後	2		○	1							
	教科理解高度科目	古文教育の理論と実践	1後	2		○	1						※講義	
		漢文教育の理論と実践	1後	2		○	1							
		現代社会教育の理論と実践	1後	2		○	1							
		歴史教育の理論と実践	1後	2		○	1							
	野教分科	芸術文化教育の理論と実践	1後	2		○	1							
		音楽文化教育の理論と実践	1後	2		○	1							
		英分語野教	1後	2		○	1						※講義	
		外国語教育の理論と実践	1後	2		○	1							
	多文化理解高度化プログラム	日本語学実践演習	2前	2		○	1							
		日本近代文学実践演習	2前	2		○	1							
		日本古典文学実践演習	2前	2		○	1						※講義	
		ヨーロッパ芸術文化実践演習	2前	2		○	1							
ヨーロッパ言語文化実践演習A		2前	2		○	1								
ヨーロッパ言語文化実践演習B		2前	2		○	1								
国際音楽文化実践演習		2前	2		○	1								
日中近代言語文化実践演習		2前	2		○	1								
日中古典言語文化実践演習		2前	2		○	1								
国際知識文化実践演習		2前	2		○	1								
国際現代社会文化実践演習		2前	2		○	1								
国際歴史文化実践演習		2前	2		○	1								
フィールド研究科目	日英翻訳論実践演習	2前	2		○	1								
	国際関係史実践演習	2前	2		○	1								
	自然言語処理実践演習	2前	2		○	1								
	国際協働教育実践演習	1前	2		○	21	12				兼1	集中		
	日本型教育システム開発実践演習	2前	2		○	11	6				兼1	集中		
	日本語教育支援実践演習	2前	2		○	10	6				兼1	集中		
小計 (58科目)			—	0	116	0	—	23	12	0	0	0	兼16	—
課題研究科目	課題研究Ⅰ		2前	2			○	25	15	0	0	0		
	課題研究Ⅱ		2後	2			○	25	15	0	0	0		
	小計 (2科目)			—	4	0	0	—	25	15	0	0	0	0
合計 (85科目)			—	4	151	0	—	26	15	0	0	0	兼20	—
学位又は称号		修士 (教育学)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係							

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p>【修了要件】 大学院研究科に2年以上（長期履修学生にあつては3年以上）在学し、心理・教育支援コース及び教育ファシリテーションコースは所定の30単位以上、国際協働教育コースは所定の34単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文の審査及び最終試験に合格すること。</p> <p>【履修方法】 [専攻共通科目] 専攻共通科目の授業科目3科目6単位を必修とする。</p> <p>[コース共通科目] 選択するコース共通科目のうち、国際協働教育コースを選択する者は、選択必修2科目4単位以上を、教育ファシリテーションコースを選択する者は、必修2科目4単位を履修する。</p> <p>[コース・領域専門科目] ○心理・教育支援コース 選択するコース専門科目のうち、「保健医療分野に関する理論と支援の展開 I」「福祉分野に関する理論と支援の展開 I」「教育分野に関する理論と支援の展開 I」の3科目3単位を必修とし、選択するコース専門科目からその他14単位以上の計17単位以上を履修する。</p> <p>○国際協働教育コース (日本型教育システム開発領域) 選択する領域専門科目のうち、「日本型教育システムにおけるICT活用の方法」「日本型教育システムの諸相」の2科目4単位を必修とし、「数理科学教育特論」「情報科学教育特論」「自然科学教育特論(物理・化学分野)」「自然科学教育特論(生命・地学分野)」から選択必修1科目2単位、「数理科学教育特論演習」「情報科学教育特論演習」「自然科学教育特論演習(物理・化学分野)」「自然科学教育特論演習(生命・地学分野)」から選択必修1科目2単位を含み、計16単位以上を履修する。</p> <p>(日本語教育支援高度化領域) 選択する領域専門科目区分のうち、「日本語教育理解高度化科目」から必修3科目6単位、「対照言語学理解高度化科目」から選択必修1科目2単位以上、「教科理解高度化科目」から選択必修1科目2単位以上、「多文化理解高度化プログラム」からいずれかのプログラム選択必修3科目6単位以上の計16単位以上を履修する。</p> <p>[フィールド研究科目] 心理・教育支援コースまたは国際協働教育コースを選択する者を対象とし、心理・教育支援コースを選択する者は「心理実践実習 IA」の1科目3単位を、国際協働教育コースを選択する者は「国際協働教育実践演習」と選択する領域の実践演習の2科目4単位を必修とする。</p> <p>[課題研究科目] 課題研究科目の授業科目2科目4単位を必修とする。</p>	1 学年の学期区分	2学期
	1 学期の授業期間	15週
	1 時限の授業時間	90分

教育課程等の概要																	
(教育学研究科 高度教育支援開発専攻)													天王寺キャンパス				
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専攻共通科目	教育イノベーション概論	1前	2			○			1					集中 ※演習、集中、オムニバス ※演習、集中、オムニバス・共同(一部)			
	現代社会の動向と教育協働	1前	2			○			2	1							
	現代的教育研究方法演習	1後	2			○			1	2							
	小計(3科目)	—	6	0	0	—	—	—	4	3	0	0	0		—		
教育フューチャー シリーション コース科目	コース共通科目	社会に開かれた教育課程の実践研究	1前		2		○							兼1	※演習		
		学習支援特論	1後		2		○			1					※演習		
		教育イノベーション 領域専門科目 シリーション 開	教育ポートフォリオとデータ	1前		2		○								兼1	
			学修評価とデータ	1後		2		○								兼1	
	メディア・情報リテラシー特論		1後		2		○								兼1		
	人工知能概論		1後		2		○			1						※演習	
	データ分析のためのプログラミング		1後		2			○			1						
	データ解析のための数学概論		1前		2		○			5						オムニバス	
	先端技術・データ活用演習		1後		2			○				1					
	先端技術の教育展開と教育データ分析演習		1後		2			○			1						
	地域教育・芸術 支援人材 高度化 領域専門 科目		生涯学習推進行政の動向	1後		2		○			1						※演習
			生涯学習施設・職員特論	1前		2			○			1					※講義
		地域教育とキャリア形成	1後		2			○		1						※講義	
		地域教育実践演習	2前		2			○		1							
		識字・成人基礎教育実践研究	1後		2		○								兼1	※演習	
		地域音楽教育支援研究	2前		2			○		3	1					オムニバス・共同	
		地域美術教育支援研究	2前		2			○			3					オムニバス	
		音楽教育支援力高度化演習A	1前		2			○			1						
		音楽教育支援力高度化演習B	1前		2			○			1						
		音楽教育支援力高度化演習C	1前		2			○		1							
		音楽教育支援力高度化演習D	1前		2			○		1							
		音楽教育支援力高度化演習E	1前		2			○		1							
		音楽教育支援力高度化演習F	1前		2			○		1							
		音楽教育支援力高度化演習G	1前		2			○		1							
		美術教育支援力高度化演習	1後		4				○			3					オムニバス
		健康・安全 教育 高度化 領域専門 科目	地域・学校における健康科学教育の理論と方法I	1前		2		○			1						
			地域・学校における健康科学教育の理論と方法II	1前		2		○			1						※演習
			地域・学校における健康科学教育の理論と方法III	1前		2		○			1	1					※演習
			地域・学校における生活環境学教育の理論と方法I	1前		2		○			1						※演習
	地域・学校における生活環境学教育の理論と方法II		1前		2		○			1	1					※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法I		1前		2		○			1						※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法II		1前		2		○			1	1					※演習	
	地域・学校における安全教育の理論と方法III		1前		2		○			1	1					※演習	
地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法I	1前			2		○			1								
地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法II	1前			2		○			1								
地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法III	1前			2		○			1								
健康科学の課題解決のための実践研究I	1後			2			○			1					※講義		
健康科学の課題解決のための実践研究II	1後			2			○			1					※講義		
健康科学の課題解決のための実践研究III	1後			2			○			1	1				※講義		
生活環境学の課題解決のための実践研究I	1後			2			○			1					※講義		
生活環境学の課題解決のための実践研究II	1後			2			○			1					※講義		
安全教育学の課題解決のための実践研究I	1後			2			○			1					※講義		
安全教育学の課題解決のための実践研究II	1後			2			○			1	1				※講義		
安全教育学の課題解決のための実践研究III	1後			2			○			1					※講義		
スポーツ実践の課題解決のための実践研究I	1後			2			○			1					※講義		
スポーツ実践の課題解決のための実践研究II	1後		2			○			1					※講義			

プロジェクトベース科目	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅲ	1後		2			○		1								※講義
	プロジェクト演習A	1前		2			○		22	11							兼1 オムニバス・共同
	プロジェクト演習B	1後		2			○		22	11							兼3 オムニバス・共同
	小計(49科目)	—	0	100	0		—		22	11	0	0	0	0	兼7	—	
課題研究科目	課題研究Ⅰ	2前	2				○		22	11	0	0	0				
	課題研究Ⅱ	2後	2				○		22	11	0	0	0				
	小計(2科目)	—	4	0	0		—		22	11	0	0	0	0			
合計(54科目)		—	10	100	0		—		22	12	0	0	0	0	兼7	—	
学位又は称号		修士(教育学)			学位又は学科の分野			教育学・保育学関係									
卒業要件及び履修方法									授業期間等								
<p>【修了要件】 大学院研究科に2年以上(長期履修学生にあっては3年以上)在学し、心理・教育支援コース及び教育ファシリテーションコースは所定の30単位以上、国際協働教育コースは所定の34単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文の審査及び最終試験に合格すること。</p> <p>【履修方法】 [専攻共通科目] 専攻共通科目の授業科目3科目6単位を必修とする。</p> <p>[コース共通科目] 選択するコース共通科目のうち、国際協働教育コースを選択する者は、選択必修2科目4単位以上を、教育ファシリテーションコースを選択する者は、必修2科目4単位を履修する。</p> <p>[コース・領域専門科目] ○教育ファシリテーションコース (教育イノベーション開発領域) 選択する領域専門科目のうち、「先端技術・データ活用演習」「先端技術の教育展開と教育データ分析演習」の2科目4単位を必修とし、計12単位以上を履修する。</p> <p>(地域教育・芸術支援人材高度化領域) 選択する領域専門科目から8単位以上を選択必修とし、選択する領域専門科目又は教育ファシリテーションコースその他領域専門科目から2科目4単位以上の計12単位以上を履修する。</p> <p>(健康・安全教育高度化領域) 選択する領域専門科目のうち、「地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」「地域・学校における生活環境学教育の理論と方法Ⅰ/Ⅱ」「地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」「地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」から選択必修3科目6単位、「健康科学の課題解決のための実践研究Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」「生活環境学の課題解決のための実践研究Ⅰ/Ⅱ」「安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」「スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」から選択必修2科目4単位、教育ファシリテーションコースその他領域専門科目から1科目2単位以上の計12単位以上を履修する。</p> <p>[プロジェクトベース科目] 教育ファシリテーションコースを選択する者を対象とし、「プロジェクト演習A」「プロジェクト演習B」の2科目4単位を必修とする。</p> <p>[課題研究科目] 課題研究科目の授業科目2科目4単位を必修とする。</p>									1学年の学期区分			2学期					
									1学期の授業期間			15週					
									1時限の授業時間			90分					

教育課程等の概要														
（教育学研究科 健康科学専攻【既設】）														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基礎科目	生涯教育組織論特論	1・2		2		○			1					
	生涯学習と図書館	1・2		2		○				1				
	人間関係論特論	1・2		2		○			1					
	人間生態学特論	1・2		2		○				1				
	環境健康学特論	1・2		2		○			1					
	地域健康管理学特論	1・2		2		○			1					
	健康生理学特論	1・2		2			○			1				
	生活科学特論I	1・2		2		○				1				
	スポーツ科学論特論II	1・2		2		○			1					
	小計（9科目）	—	—	0	18	0	—	—	—	5	4	0	0	0
専攻専門科目	生涯教育組織論演習	1・2		2			○		1					
	学習社会論特論	1・2		2		○			1					
	生涯発達論演習	1・2		2			○		1					
	生涯教育計画論演習	1・2		2			○		1					
	大学開放論	1・2		2			○		1					
	図書館情報システム特論	1・2		2		○				1				
	図書館情報システム演習	1・2		2			○			1				
	情報システムと図書館	1・2		2		○				1				
	社会行動論特論	1・2		2		○								兼1
	社会行動論演習	1・2		2			○			1				
	組織行動学特論	1・2		2			○		1					
	組織行動学演習	1・2		2			○		1					
	人間関係論演習	1・2		2			○		1					
	発達人間学特論II	1・2		2			○		1					
	発達人間学特論III	1・2		2		○			1					
	発達人間学ゼミナールI	1・2		2			○		2					
	発達人間学ゼミナールII	1・2		2			○		1					
	発達人間学ゼミナールIII	1・2		2			○		1					
	人間生態学演習	1・2		2			○			1				
	健康教育学特論	1・2		2		○				1				
	環境健康学演習	1・2		2			○		1					
	人間生態学ゼミナールI	1・2		2			○			1				
	人間生態学ゼミナールII	1・2		2			○		1					
	地域健康管理学演習	1・2		2			○		1					
	心身健康学ゼミナールI	1・2		2			○			1				
	心身健康学ゼミナールII	1・2		2			○		1					
	健康生理学演習	1・2		2			○			1				
	生活科学特論II	1・2		2		○				1				
	居住環境学特論I	1・2		2		○			1					
	居住環境学特論II	1・2		2		○			1					
	生活科学ゼミナールI	1・2		2			○			1				
	生活科学ゼミナールII	1・2		2			○		1					
スポーツ科学論特論I	1・2		2			○					1			
スポーツ科学論特論III	1・2		2		○			1						
スポーツ科学論特論IV	1・2		2			○		1						
スポーツ科学論特論演習I	1・2		2			○					1			
スポーツ科学論特論演習II	1・2		2			○		1						
スポーツ科学論特論演習III	1・2		2			○		1						

	スポーツ科学論特論演習Ⅳ	1・2		2		○	○		1						
	スポーツ文化論特論	1・2		2		○			1						
	スポーツ文化論特論演習	1・2		2			○		1						
	小計 (41科目)	—	0	82	0		—		14	5	0	1	0	兼1	—
課題研究	課題研究Ⅰ	2	3				○		14	5		1			
	課題研究Ⅱ	2	3				○		14	5		1			
	小計 (2科目)	—	6	0	0		—		14	5	0	1	0	0	—
合計 (52科目)		—	6	100	0		—		14	5	0	1	0	兼1	—
学位又は称号		修士 (学術)		学位又は学科の分野				教育学・保育学関係							
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
a 基礎科目のうちから4単位以上を修得すること。 b 所属専攻の開講科目のうちから16単位以上を修得すること。 c 所属専攻又は他専攻の開講科目のうちから4単位以上を修得すること。 d 所属専攻の「課題研究Ⅰ・Ⅱ」各3単位、計6単位を修得すること。								1学年の学期区分				2期			
								1学期の授業期間				15週			
								1時限の授業時間				90分			

教育課程等の概要															
(教育学研究科 総合基礎科学専攻【既設】)															
科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	位相構造論I	1・2		2				○		1					
	位相構造論II	1・2		2				○		1					
	数理構造論I	1・2		2			○			1					
	数理構造論II	1・2		2			○			1					
	代数構造論I	1・2		2			○			1					
	代数構造論II	1・2		2			○			1					
	ニューラル・ロボット工学	1・2		4				○		1	1				
	データ構造論	1・2		4				○			1				兼1
	情報科学特論	1・2		4				○		3	2				兼1
	光物性論I	1・2		2			○			1					
	光物性論II	1・2		2			○			1					
	分子構造論I	1・2		2			○			1					
	分子構造論II	1・2		2			○			1					
	化学生態学A	1・2		2				○			1				
	バイオテクノロジー特論A	1・2		2			○			1					
	微生物生化学特論A	1・2		2			○			1					
	発生機構解析A	1・2		2			○								兼1
	地圏システム論I	1・2		2			○				1				
	大気圏システム論I	1・2		2			○			1					
	生物圏システム論I	1・2		2			○			1					
小計 (20科目)		—	0	46	0			—	12	4	0	0	0	兼2	—
専攻専	微分構造論I	1・2		2				○		1					
	微分構造論II	1・2		2				○		1					
	代数システム論I	1・2		2			○			1					
	代数システム論II	1・2		2			○			1					
	確率過程システム論I	1・2		2			○			1					
	確率過程システム論II	1・2		2			○			1					
	数理統計システム論I	1・2		2			○			1					
	数理統計システム論II	1・2		2			○			1					
	応用数理システム論I	1・2		2			○			1					
	応用数理システム論II	1・2		2			○			1					
	数理解析システム論I	1・2		2			○				1				
	数理解析システム論II	1・2		2			○				1				
	システム設計論	1・2		4			○			1					兼1
	ソフトコンピューティング特論	1・2		2				○		1					
	ソフトウェア設計特論	1・2		2				○			1				
	情報ネットワーク特論	1・2		2			○				1				兼1
	応用情報学特論	1・2		4				○		3	1				
	情報数学特論	1・2		4				○		1					
	情報科学特別実習	1・2		4				○		3	2				兼1
	情報教育特論	1・2		2			○			1	1				
ハードウェア特論	1・2		2				○		1	1					
量子物性論I	1・2		2			○				1					
量子物性論II	1・2		2			○				1					
基礎物質科学ゼミナールI	1・2		4				○		1						
基礎物質科学ゼミナールII	1・2		4				○			1					
物質構造論I	1・2		2				○		1						
物質構造論II	1・2		2				○		1						

門 科 目	物質構造論III	1・2		2			○		1						
	物質構造論IV	1・2		2		○	○		1						
	分子構造論III	1・2		2		○			1						
	分子構造論IV	1・2		2		○			1						
	物質構造論ゼミナール	1・2		4			○		1	1					
	分子構造論ゼミナール	1・2		4			○		2						
	機能分子合成論I	1・2		2		○			1						
	機能分子合成論II	1・2		2		○			1						
	機能分子物性論I	1・2		2		○			1						
	機能分子物性論II	1・2		2		○			1						
	物質反応論ゼミナール	1・2		4		○			1						
	物質機能論ゼミナール	1・2		4			○		2						
	機能分子設計特論I	1・2		2		○			1						
	機能分子設計特論II	1・2		2		○			1						
	化学生態学B	1・2		2			○		1						
	バイオテクノロジー特論B	1・2		2		○			1						
	微生物生化学特論B	1・2		2		○			1						
	発生機構解析B	1・2		2		○								兼1	
	生命科学ゼミナールI	1・2		4			○		1						
	生命科学ゼミナールII	1・2		4			○		2					兼1	
	地圏システム論II	1・2		2			○		1						
大気圏システム論II	1・2		2		○			1							
生物圏システム論II	1・2		2		○			1							
宇宙地球圏システム論ゼミナールI	1・2		4			○		2	1						
宇宙地球圏システム論ゼミナールII	1・2		4			○		2	1						
小計 (52科目)		—	0	132	0		—	16	8	1	0	0	兼3	—	
特 別 研 究 科 目	数理科学講義I	2		6			○	2		1					
	数理科学講義II	2		6			○	2	1						
	情報科学特別研究	2		6			○	3	2				兼1		
	基礎物質科学特別研究	2		6			○	1	1						
	構造物質科学特別研究	2		6			○	3	1						
	機能物質科学特別研究	2		6			○	2	1						
	生命科学特別研究	2		6			○	2	1				兼1		
	宇宙地球圏システム特別研究	2		6			○	2	1						
小計 (8科目)		—	0	48	0	—	17	8	1	0	0	兼2	—		
合計 (80科目)			—	0	226	0	—	17	8	1	0	0	兼3	—	
学位又は称号		修士 (学術)		学位又は学科の分野				教育学・保育学関係							
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
a 所属コースの基礎科目のうちから4単位以上を修得すること。 b 所属コースの開講科目のうちから16単位以上を修得すること。 c 所属専攻又は他専攻の開講科目のうちから4単位以上を修得すること。 d 所属コースの特別研究 (特別研究相当科目を含む。)のうちから6単位を修得すること。								1 学年の学期区分			2 期				
								1 学期の授業期間			1 5 週				
								1 時限の授業時間			9 0 分				

教育課程等の概要																
（教育学研究科 国際文化専攻【既設】）																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎科目	日本古典言語文化論I	1・2		2				○			1					
	中国古典言語文化論I	1・2		2				○			1					
	英米語圏言語文化論I	1・2		2				○		1						
	言語理論研究I	1・2		2				○		1						
	ドイツ語圏言語文化論A	1・2		2			○			1						
	フランス言語文化論I	1・2		2				○		1						
	西洋歴史文化論I	1・2		2				○		1						
	西洋経済構造論I	1・2		2				○		1						
	小計（8科目）	—	0	16	0			—		6	2	0	0	0	0	—
専攻専門科目	日本古典言語文化論II	1・2		2				○			1					
	日本古典言語文化論III	1・2		2				○			1					
	日本古典言語表現研究	1・2		2				○			1					
	日本近代言語文化論I	1・2		2				○			1					
	日本近代言語文化論II	1・2		2				○		1						
	日本近代言語文化論III	1・2		2			○			1						
	日本近代文芸研究	1・2		2				○			1					
	中国古典言語文化論II	1・2		2				○			1					
	中国古典言語文化論III	1・2		2				○			1					
	中国言語文化構造論	1・2		2				○			1					
	中国近代言語文化論I	1・2		2				○			1					
	中国近代言語文化論II	1・2		2				○			1					
	英米語圏言語文化論II	1・2		2				○			1					
	米語圏文化研究I	1・2		2				○			1					
	米語圏文化研究II	1・2		2				○			1					
	米語圏文化研究特論	1・2		2				○			1					
	言語理論研究II	1・2		2				○		1						
	言語運用論I	1・2		2				○			1					
	言語表現論I	1・2		2				○			1					
	言語表現論II	1・2		2				○			1					
	言語比較論	1・2		2			○			1						
	応用言語学特殊研究I	1・2		2			○				1					
	応用言語学特殊研究II	1・2		2			○				1					
	西洋思想文化論I	1・2		2			○									兼1
	西洋思想文化論II	1・2		2			○									兼1
	西洋思想文化特論	1・2		2			○									兼1
	西洋歴史文化論II	1・2		2					○		1					
	西洋歴史文化特論	1・2		2					○		1					
	西洋社会構造論I	1・2		2			○									兼1
	西洋社会構造論II	1・2		2			○									兼1
	西洋経済構造論II	1・2		2			○				1					
	独語圏文化研究I	1・2		2			○				1					
独語圏文化研究II	1・2		2			○				1						
独語圏文化研究III	1・2		2			○				1						
仏語圏文化研究I	1・2		2					○			1					
仏語圏文化研究II	1・2		2					○			1					
アジア歴史文化論I	1・2		2					○							兼1	
アジア歴史文化論II	1・2		2					○							兼1	
日本歴史文化論II	1・2		2					○							兼1	

	比較法文化論I	1・2		2			○			1					
	比較法文化論II	1・2		2			○			1					
	日本地域環境研究I	1・2		2			○		1						
	日本地域環境研究II	1・2		2			○		1						
	小計 (43科目)	—	0	86	0		—		9	8	0	0	0	兼5	—
課題研究	課題研究 I	2	3				○		9	7					
	課題研究 II	2	3				○		9	7					
	小計 (2科目)	—	6	0	0		—		9	7	0	0	0	0	—
合計 (53科目)		—	6	102	0		—		9	8	0	0	0	兼5	—
学位又は称号		修士 (学術)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
a 重点を置く教育研究分野の授業科目のうちから、基礎科目2単位以上を含め、12単位以上を修得すること。 b 重点を置く教育研究分野の授業科目又は所属専攻の他の教育研究分野の授業科目 (共通科目を含む。)のうちから、8単位以上を修得すること。 c 所属専攻又は他専攻の開講科目のうちから4単位以上を修得すること。 d 所属専攻の「課題研究I・II」各3単位、計6単位を修得すること。								1学年の学期区分				2期			
								1学期の授業期間				15週			
								1時限の授業時間				90分			

教 育 課 程 等 の 概 要																
（教育学研究科 芸術文化専攻【既設】）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
基礎 科目	美学総論	1・2		2		○			1							
	芸術表現学	1・2		2				○	1							
	音楽学研究	1・2		2				○	1							
	音楽文化研究	1・2		2				○							兼1	
	小計（4科目）	—	0	8	0	—	—	—	2	0	0	0	0	兼1	兼1	—
	音楽作品研究B	1・2		2				○	1							
	音楽作品研究C	1・2		2				○		1						
	音楽作品研究D	1・2		2				○	1							
	音楽作品研究E	1・2		2				○		1						
	音楽作品研究F	1・2		2				○	1							
	音楽作品研究G	1・2		2				○	1							
	音楽作品研究H	1・2		2		○			1							
	音楽作品研究I	1・2		2				○							兼1	
	音楽作品研究J	1・2		2				○	1							
	音楽創造研究	1・2		2				○	1							
	音楽表現研究B	1・2		2		○			1							
	音楽表現研究C	1・2		2				○		1						
	音楽表現研究D	1・2		2				○	1							
	音楽表現研究E	1・2		2				○		1						
	音楽表現研究F	1・2		2		○			1							
	音楽表現研究G	1・2		2				○	1							
	音楽表現研究H	1・2		2				○	1							
	音楽社会学研究	1・2		2				○							兼1	
	音楽民族誌研究	1・2		2				○	1							
	民俗音楽研究	1・2		2		○									兼1	
	民俗芸能研究	1・2		2		○									兼1	
小計（21科目）	—	0	42	0	—	—	—	—	7	2	0	0	0	兼3	兼3	—
美術 理論 科目	芸術鑑賞学	1・2		2		○									兼1	
	美術書研究	1・2		2				○	1							
	書鑑賞特論	1・2		2		○									兼1	
	書法特論	1・2		2				○							兼1	
	書道史特論	1・2		2		○									兼1	
	小計（5科目）	—	0	10	0	—	—	—	1	0	0	0	0	兼2	兼2	—
専攻 専門 科目	演奏実践研究I	1・2		2				○	7	2						
	演奏実践研究II	1・2		2				○	7	2						
	絵画演習	1・2		4				○		1						
	ヴィジュアル・デザイン演習	1・2		4				○		1						
	造形表現特講A	1・2		2				○		1						
	造形表現特講B	1・2		2				○		3						
	造形表現特講C	1・2		2				○		1						
	造形表現特講D	1・2		2				○		1						
	総合造形演習	1・2		4				○		1						
	書法研究AI	1・2		2				○		1						
	書法研究AII	1・2		2				○		1						
	書法研究BI	1・2		2				○		1						
	書法研究BII	1・2		2				○		1						
	書法研究CI	1・2		2				○							兼1	
書法研究CII	1・2		2				○							兼1		

	書法研究D I	1・2		2		○		1						
	書法研究D II	1・2		2		○		1						
	書法研究E I	1・2		2		○		1						
	書法研究E II	1・2		2		○		1						
	小計 (19科目)	—	0	44	0	—		8	6	0	0	0	兼1	—
課題研究	課題研究I	2	3			○		9	6					
	課題研究II	2	3			○		9	6					
	小計 (2科目)	—	6	0	0	—		9	6	0	0	0	—	—
合計 (51科目)		—	6	104	0	—		9	6	0	0	0	兼5	—
学位又は称号		修士 (芸術)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係							
卒業要件及び履修方法								授業期間等						
a 基礎科目のうちから6単位以上を修得すること。 b 音楽理論科目から4単位以上を修得すること。 c 美術理論科目から4単位以上を修得すること。 d 所属専攻の開講科目のうちから6単位以上を修得すること。 e 所属専攻又は他専攻の開講科目のうちから4単位以上を修得すること。 f 所属専攻の「課題研究I・II」各3単位、計6単位を修得すること。								1学年の学期区分			2期			
								1学期の授業期間			15週			
								1時限の授業時間			90分			

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科 高度教育支援開発専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専攻共通科目	教育イノベーション概論	Society5.0社会を支えるAIやICT、ビッグデータなどの先端技術があらゆる産業や社会生活に取り入れられ、それによる超スマート社会が大きな変革として訪れようとしている。教育現場においては、これら先端技術をいかに活用して教育・学習効果を最大化するか、様々な教育課題を解決できるかが、課題として挙げられる。 本授業では、AI、ICT等の教育政策、海外における学びのあり方の現状、AI等の技術を活用した教育ソフトウェア開発の動向などの講義や議論を通じて、教育現場においてAIやICT等を利活用するために必要な基礎的知識、及び現場で活用できるデータサイエンスの入門知識を習得する。	
	現代社会の動向と教育協働	現代社会の動向について把握することを通じて、現代社会における教育協働の意義・必要性について理解する。さらに、教育協働に関わる理論や政策、実践について理解を深める。 (オムニバス方式/全15回) (25 出相泰裕/7回) 知識基盤社会、Society5.0、SDGs、グローバル化、地方創生、人生100年時代、格差社会、男女共同参画(子育て・家庭の実情も含めて)、新しい公共などのキーワードを絡めて、変容する現代社会全般の動向について学び、そこから(生涯)教育・学習及び教育協働の重要性が高まっていることを理解する。 (54 寺坂明子/2回) 現代社会における子どもの動向を発達心理学の最新の知見を組み入れながら考察するとともに、現代社会における子ども支援について理解する。 (38 新崎国広/6回) 教育協働に関わる教育政策について取り上げ、続いて、教育協働論や教育福祉論といった本専攻に関わる理論についても理解を深める。また行政・専門機関間の協働のみならず、インフォーマルな社会資源(NPO・ボランティア等)との協働、並びにSSWやCSWも含めた福祉・心理分野といった他職種との協働に関わる実践について取り上げ、様々な形の教育協働の実践について理解する。	オムニバス方式 講義20時間 演習10時間
	現代的教育研究方法演習	Society5.0社会は、多様な人々が高度に情報化された社会の中で多様な価値を求め、実現していく社会である。そのような社会で価値を生み出すには、様々なバックグラウンドを有する人々が分野をまたいで学び、研究を進めていく必要がある。 本授業では、複数分野における研究の進め方や手法を学びそれらの融合を図ることで、大学院修了後も様々な課題に直面した際に主体的に分析、考察、解決ができるような汎用的な研究能力を培うことを目標とし、複数分野の教員の指導の下、それぞれの分野における研究手法(研究計画立案、調査・分析方法、文献や資料の収集方法、及び論文の書き方)について学ぶ。具体的には、講義と演習により、量的調査研究・質的調査研究・事例研究・比較研究・文献研究に関わる手法の基礎的部分の習得をめざす。その中で、それらの手法を使った研究論文を講読し、実際にどのように研究計画の展開と論文作成を行うのかについて学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (24 辻岡強・53 高鞆裕樹・45 榎木泰介/3回) (共同) 全体のオリエンテーション、分野融合研究の重要性の講義、演習結果発表会等を行う。 (24 辻岡強/4回) 研究成果を社会に向けて発表する意義、研究計画の立案、論文の構成方法(特にその研究の意義づけと先行文献の調査方針)について、講義と演習を交えて実施する。 (53 高鞆裕樹/4回) 研究を進める上で必要となる、書籍・雑誌論文の探し方、統計等のデータの見つけ方、文献の管理方法、アンケートなどを用いたデータ収集の方法について、講義と演習を交えて実施する。 (45 榎木泰介/4回) 研究を具体的にすすめるにあたり必要となる、倫理審査、実験・調査の方法、データの科学的な分析方法、学術論文における図表等について、講義と演習を交えて実施する。	オムニバス方式・共同(一部) 講義20時間 演習10時間

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理・教育支援コース科目	心理支援に関する科目	保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	保健医療分野における心理支援のあり方について、臨床心理学的視点と合わせて医学的基礎知識を押さえ、保健医療分野での知識と理解を深める。医療現場での身体科医療との協働、精神疾患の知識、脳器質性障害や症状精神病などに対するアプローチ、緩和医療などについて理解するとともに、地域精神保健として予防医学的アプローチや災害での心理支援などについて、講義及び演習により基礎的技能を身につける。	講義10時間 演習5時間
		保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	「保健医療分野に関する理論と支援の展開Ⅰ」に引き続き、主として演習形式により、保健医療分野で遭遇するさまざまな事例について、展開Ⅰで身につけた基礎的技能を用いてディスカッションを行い、より実践力を身につける。また、コンサルテーションリエゾンの仕組みを理解し、公認心理師の組織での役割について考えていく。	講義5時間 演習10時間
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	主として講義により、障害者福祉（身体、知的、精神）、高齢者福祉、児童福祉の各領域について、主要な制度、家族や地域との連携、社会福祉士や精神保健福祉士などとの他職種連携、特別支援教育の理論と実践（個別教育プログラムなど）などの点について理解を深め、支援ニーズのある人への心理支援のあり方について理解する。	講義10時間 演習5時間
		福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	「福祉分野に関する理論と支援の展開Ⅰ」に引き続き、主として演習形式により、さまざまな支援の事例を通して、より実際の支援のあり方を理解し、実践できる力を身につける。	講義5時間 演習10時間
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	教育の場における心理支援の基礎となる、子どもの発達と発達障がい、不登校やいじめなどの学校教育の現代的課題、学校内外における他職種協働などに関する知識を身につける。さらに、カウンセリング等の直接的支援のみならず、教員や保護者など、子どもと直接的に関わる大人への間接的な支援の方法（行動コンサルテーションなど）についても学ぶ。関連する文献の講読とディスカッションを通して、これらの理解を深める。	講義7時間 演習8時間
		教育分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	「教育分野に関する理論と支援の展開Ⅰ」に引き続き、事例を用いた演習により、学校をはじめとする教育分野における支援に必要な知識、技能を身につける。個別事例の理解に留まらず、問題の見立てや、学校で行う心理教育的アセスメントの活用の仕方、教員との連携の仕方、資源の種類やそれらの活用の仕方など、現場で応用可能な知恵を、リサーチとディスカッションを通して蓄える。	
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	主として講義により、わが国の司法制度と犯罪や非行の推移、矯正保護機関の機能と学校との連携など、司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開に関する理解を深めることを通して、被害者と加害者をはじめ心理に関する支援を要する人の心理状態の観察や分析、心理に関する相談対応と助言指導を行うことのできる力を育成する。さらに、演習形式により、具体的な支援の方法や連携のあり方について理解を深め、実践できる力を身につける。	隔年 講義20時間 演習10時間
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅰ	講義と関連資料の輪読により、現代社会における仕事世界への移行と適応、キャリア形成、ストレス対処への支援、心理検査の理論と活用の基礎を理解する。また、リーダーシップ、モチベーション、職務満足感など、組織で働く人々への働きかけに必要な理論と応用について理解を深める。さらに、演習形式で事例検討を行い、産業・労働分野における実践的支援を展開できる力を身につける。	隔年 講義5時間 演習10時間
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅱ	「産業・労働分野に関する理論と支援の展開Ⅰ」に引き続き、講義と関連資料の輪読により、産業組織や労働場面で心理的支援を展開する際に必要な知識を習得する。とくに、ワークライフバランス、ポジティブメンタルヘルス、コンフリクトなど、組織と個人の関わり方に焦点をあてて理解を深める。また、演習形式の事例検討を通してキャリア形成、仕事不適応、心の健康にまつわる支援を実践できる力を身につける。	隔年 講義5時間 演習10時間
		心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅰ	主として知能や発達に関するアセスメントをとりあげ、心理的アセスメントに関する理論と方法を学ぶ。各種の心理検査について講義を通して理解するとともに、公刊された資料等を活用した演習形式により、聴取、行動観察、心理検査のそれぞれから得られた情報を統合したアセスメント所見を作成し、フィードバックするまでのアセスメントの過程に必要な方法を身につける。	講義5時間 演習10時間
心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅱ	主としてパーソナリティに関するアセスメントをとりあげ、心理的アセスメントに関する理論と方法を学ぶ。各種の心理検査について講義を通して理解するとともに、公刊された資料等を活用した演習形式により、聴取、行動観察、心理検査のそれぞれから得られた情報を統合したアセスメント所見を作成し、フィードバックするまでのアセスメントの過程に必要な方法を身につける。	講義5時間 演習10時間		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	心理支援に関する理論と実践	<p>心理支援の方法としての各種の心理療法について、その理論的背景と手法を講義により身につけるとともに、公刊された資料等を活用した演習形式により、問題と目的に応じた適切な支援の方法を選択することのできる力を身につける。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(6 石橋正浩／3回) 力動論に基づく心理療法の理論と方法について、資料の講読と受講者によるディスカッションを通して理解を深める。</p> <p>(54 寺坂明子／3回) 行動コンサルテーションの理論と方法について、資料を講読し、ディスカッションを通して理解を深める。</p> <p>(40 下村陽一／3回) 家族援助の理論と実際について、文献の講読を通して心理支援の理解を深める。</p> <p>(43 岩切昌宏／3回) 精神医学的立場から、アセスメントと心理療法について理解を深める。</p> <p>(65 山口正寛／3回) 発達臨床の視点から、資料の講読と受講者によるディスカッションを通して、子どもと親の支援について理解を深める。</p>	オムニバス方式 講義16時間 演習14時間
	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 I	家族構成員間の関係性に焦点を当てた心理支援の理論と方法（具体的には家族療法の理論や方法の基盤となるシステム理論及びシステムズ・アプローチ）について、講義と演習を通して支援のあり方を学ぶ。	隔年 講義8時間 演習7時間
	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 II	「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践I」に引き続き、演習形式により、家族、夫婦、コミュニティなど様々な集団における具体的な支援事例を検討し、ロールプレイを行うなど支援実践に必要な知識、技能を身につける。	隔年
	心の健康教育に関する理論と実践 I	心の健康教育を担当する心理士として必要となる健康心理学関連のさまざまな知識（予防モデル、アウトリーチ、コンサルテーション、ストレスマネジメント、レジリエンスなど）や支援の方法について、主として講義形式により説明し、理解を深める。さらに、公認心理師がかかわる様々な分野における心の健康教育の実際について、公刊された事例等を活用して演習形式により理解を深め、実践できる力を身につける。	隔年 講義10時間 演習5時間
	心の健康教育に関する理論と実践 II	教育分野で近年需要の高まっている、子どもを対象とした心理教育（自己・他者理解、コミュニケーション、ストレスマネジメント、問題解決など）の概要とその種類について講義形式で説明し、理解を深める。さらに、具体的な心理教育の実施方法について、いくつかのプログラムを取り上げ、ロールプレイを行うなど演習形式で学び、実践するための知識と技術を身につける。	隔年 講義5時間 演習10時間
	公認心理師と教師の協働的援助	<p>心理学の専門家が教育現場で活動するにあたって、教員との協働・連携体制の構築が不可欠である。不登校、問題行動、学級崩壊、学校危機などの具体的な教育課題について、理論と実践に関する講義とディスカッションを通して、現在の学校が抱える様々な今日的な課題について理解を深め、学校において心理学の専門家がどのように教師や校外の専門機関と連携し、協働的な援助を提供したらよいかを考える。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(74 水野治久／5回) 学校における協働的援助の理論的枠組みについて、チーム援助、コーディネーション委員会、学校経営、学級集団などの理論等をもとに解説する。</p> <p>(77 梅川康治／5回) 主として問題行動を示す子どもを対象としたチーム援助の理論と実際について、さまざまな事例をとりあげ、受講者同士のディスカッションに解説を加え、理解を深める。</p> <p>(79 柿慶子／5回) 主として不登校の子どもを対象としたチーム援助の理論と実際について、さまざまな事例をとりあげ、受講者同士のディスカッションに解説を加え、理解を深める。</p>	オムニバス方式 講義15時間 演習15時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実習科目	心理実践実習 I B	<p>保健医療分野を含めた各分野の施設・機関を対象とし、心理に関する支援を必要とする者やその関係者などに対する支援を実践しながら、実習指導者ならびに実習担当教員による指導を受け、以下の(ア)から(オ)までに掲げる事項を修得する。</p> <p>(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の習得 (1. コミュニケーション、2. 心理検査、3. 心理面接、4. 地域支援等)</p> <p>(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成</p> <p>(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ</p> <p>(エ) 多職種連携及び地域連携</p> <p>(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解</p> <p>(6 石橋正浩、54 寺坂明子、65 山口正寛、40 下村陽一、43 岩切昌宏)</p> <p>実習施設との連絡調整、訪問指導等を行い、実習の状況を把握するとともに、必要に応じた助言、指導を行う。</p>	
	心理実践実習 I C	<p>心理支援について、受講者が現在実践する、あるいは過去に実践したケースをもとに、集団指導をおこなう。受講者は実践した支援に関する資料を作成、発表し、集団による検討をおこなう。自らの実践を振り返るとともに、他者の実践に対して関心をもち、批判的に検討する力を身につける。</p> <p>(共同方式：5名の教員が全授業に参加する)</p> <p>(6 石橋正浩・54 寺坂明子・65 山口正寛)</p> <p>授業全体の進行、統括、討論のファシリテーションを行う。</p> <p>(40 下村陽一・43 岩切昌宏)</p> <p>臨床心理の観点から専門的な助言・指導を行う。</p>	共同
	心理実践実習 I D	<p>「心理実践実習IC」に引き続き、心理支援について、受講者が現在実践する、あるいは過去に実践したケースをもとに、集団指導をおこなう。受講者は実践した支援に関する資料を作成、発表し、集団による検討をおこなう。自らの実践を振り返るとともに、他者の実践に対して関心をもち、批判的に検討する力を身につける。</p> <p>(共同方式：5名の教員が全授業に参加する)</p> <p>(6 石橋正浩・54 寺坂明子・65 山口正寛)</p> <p>授業全体の進行、統括、討論のファシリテーションを行う。</p> <p>(40 下村陽一・43 岩切昌宏)</p> <p>臨床心理の観点から専門的な助言・指導を行う。</p>	共同
	心理実践実習 II A	<p>主として教育分野の施設・機関を対象とし、心理に関する支援を必要とする者やその関係者などに対する支援を実践しながら、実習指導者ならびに実習担当教員による指導を受け、以下の(ア)から(オ)までに掲げる事項を修得する。</p> <p>(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の習得 (1. コミュニケーション、2. 心理検査、3. 心理面接、4. 地域支援等)</p> <p>(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成</p> <p>(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ</p> <p>(エ) 多職種連携及び地域連携</p> <p>(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解</p> <p>(6 石橋正浩、54 寺坂明子、65 山口正寛、40 下村陽一、43 岩切昌宏)</p> <p>実習施設との連絡調整、訪問指導等を行い、実習の状況を把握するとともに、必要に応じた助言、指導を行う。</p>	
	心理実践実習 II B	<p>保健医療分野を含めた各分野の施設・機関を対象とし、心理に関する支援を必要とする者やその関係者などに対する支援を実践しながら、実習指導者ならびに実習担当教員による指導を受け、以下の(ア)から(オ)までに掲げる事項を修得する。</p> <p>(ア) 心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の習得 (1. コミュニケーション、2. 心理検査、3. 心理面接、4. 地域支援等)</p> <p>(イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成</p> <p>(ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ</p> <p>(エ) 多職種連携及び地域連携</p> <p>(オ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解</p> <p>(6 石橋正浩、54 寺坂明子、65 山口正寛、40 下村陽一、43 岩切昌宏)</p> <p>実習施設との連絡調整、訪問指導等を行い、実習の状況を把握するとともに、必要に応じた助言、指導を行う。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		心理実践実習ⅡC	<p>「心理実践実習IC」「同ID」に引き続き、心理支援について、受講者が現在実践する、あるいは過去に実践したケースをもとに、集団指導をおこなう。受講者は実践した支援に関する資料を作成、発表し、集団による検討をおこなう。自らの実践を振り返るとともに、他者の実践に対して関心をもち、批判的に検討する力を身につける。</p> <p>(共同方式：5名の教員が全授業に参加する)</p> <p>(6 石橋正浩・54 寺坂明子・65 山口正寛) 授業全体の進行、統括、討論のファシリテーションを行う。</p> <p>(40 下村陽一・43 岩切昌宏) 臨床心理の観点から専門的な助言・指導を行う。</p>	共同
		心理実践実習ⅡD	<p>「心理実践実習IC」「同ID」「同IIC」に引き続き、心理支援について、受講者が現在実践する、あるいは過去に実践したケースをもとに、集団指導をおこなう。受講者は実践した支援に関する資料を作成、発表し、集団による検討をおこなう。自らの実践を振り返るとともに、他者の実践に対して関心をもち、批判的に検討する力を身につける。</p> <p>(共同方式：5名の教員が全授業に参加する)</p> <p>(6 石橋正浩・54 寺坂明子・65 山口正寛) 授業全体の進行、統括、討論のファシリテーションを行う。</p> <p>(40 下村陽一・43 岩切昌宏) 臨床心理の観点から専門的な助言・指導を行う。</p>	共同
	フィールド研究科目	心理実践実習ⅠA	<p>実習に対する姿勢や態度に関する事前指導ならびに複数の分野にわたる施設の見学を通して、心理士が業務として何を求められており、何をしているのかを具体的に理解するとともに、心理士として現場で必要とされる基礎的な姿勢・態度、ならびに社会人としての素養を身につける。</p> <p>(6 石橋正浩、54 寺坂明子、65 山口正寛、40 下村陽一、43 岩切昌宏) 実習施設との連絡調整、訪問指導等を行い、実習の状況を把握するとともに、必要に応じた助言、指導を行う。</p>	
国際協働教育コース科目	コース共通科目	JSLカリキュラムの理論と実践	<p>日本国内では、言語的、文化的に多様な背景を持つ児童生徒の数が増えており、教育現場ではそのような児童生徒に対応できる人材が求められている。</p> <p>本授業では、バイリンガル教育や年少者日本語教育に関する理論、国内外での教育実践例を学び、これらの観点から、日本国内の日本語指導が必要な児童生徒が抱える課題を捉え直す。</p> <p>そして、言語的、文化的に多様な背景を持つ子どもたちの教室での学習、成長を支える効果的な支援のあり方について議論し、子どもたちの多様性を考慮しながら学習上の課題を解決する方策を見出すことができる分析力と実践力を身につけることを目指す。</p> <p>授業では、講義だけでなく、留学生と日本人等学生がグループになって指導案の作成練習やディスカッションを行う等、教育現場で必要とされる「協働」による活動も積極的に取り入れる。</p>	
		国際関係論	<p>20世紀の世界では、経済のグローバル化が進行するなかで、戦争・民族紛争・テロが絶えない。</p> <p>本講義は、20世紀前半の国際関係史を理解することで現代社会の国際紛争の原因を探る。特にアメリカ合衆国と東アジアの国際関係の展開過程を中心に、ヒトの国際移動、イメージ、メディア、映画表現などのさまざまな角度から考察する。アメリカ合衆国と東アジアとの文化接触・摩擦の歴史的形成過程を総合的に分析することにより、現代社会に存在するさまざまな人種・民族・宗教などの文化的諸価値が、いかにして公平で平和的に共存できるかを考える。留学生と日本人等学生との議論を通じて、グローバル社会に必要な視野および思考力・判断力とは何かを学習する。</p>	
		国際比較文化論	<p>本授業では、ポスト・コロニアル論、世界文学論といった近年の研究成果を参照しつつ、翻訳の文学的、文化的意味を考察する。また、翻訳という観点から、文化論、文学論に潜むナショナリズムを批判的に検討する。</p> <p>言語がその国特有の文化の基盤をなしているという見方は、今日に至るまで広く受け入れられている。古典文学は、個人的な才能によって生みだされた作品であると同時に、国民の共有財産でもある。翻訳は、原典を読むための便宜的な作業にしかすぎず、原典を正確に理解するためには、原語で読むべきだとされる。このような文学観に立つかぎり、翻訳は周辺の意味しかもちえない。しかし、まさに近代国家の生成において、本質的な役割を演じた翻訳があり、ドイツにおけるルター聖書の翻訳、江戸時代末期における蘭学といった具体的な事例に即して考える。授業は、講義を中心に進めるが、随時、留学生、日本人等学生それぞれの文化観をふまえた発言を求めらる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本型教育システム開発領域専門科目	日本型教育システムにおけるICT活用の方法	<p>情報機器の急速な発展により、従来の視聴覚教育からタブレット端末や電子黒板を活用した教育の授業実践へと、授業を取り巻く情報環境は大きく変化してきた。そこで本講義では、現代社会における日本の初等中等教育課程の授業を中心とする学校活動において、2020年代を見越して、各教科の授業実践を高度化するためにはどのようにICTを活用することができるのか、学習者にとって効果的な利用の方法は何かなどについて探究する。また、それぞれの教科について、今後どのようにICTの活用を進めて行くべきなのか、様々な国でも可能なICT活用とはどうあるべきなのか、グループ学習を交えながら学んでいく。</p>	講義12時間 演習18時間
	日本型教育システムの諸相	<p>日本の学校教育では、体験や活動、実技を取り入れ、また低学年から「もの」「ことば」「からだ」を使い、実物と触れさせながら学ぶ活動をおこなってきた。本講義では遊びや歌、絵本、伝承や自然、楽器や生活道具、そしてそれらを用いた学習活動に注目し、学校教育の変遷も視野に入れながら、次世代を育てる教育のあり方を考察する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(66 石川聡子／3回) 日本の科学絵本を読み比べたり紹介しあいながら、その特徴についてグループディスカッションをおこなう。また、自然の事物・現象を用いた遊びや散歩、観察など身近な自然に触れ合う工夫について解説する。自然へのふれあい方の自国と日本の相違をグループディスカッションする。</p> <p>(80 井上功一／2回) 運動遊びを通じた子どもの社会的な発達について解説する。また、体を動かすことによる身体と心の育ちについて解説する。社会や生活の中で子どもが身体を動かす機会の保障についてグループで考察する。</p> <p>(67 井上博文／1回) ことばを用いた遊びや語りについて解説する。ことばの遊びや語りなどを体験し、ディスカッションする。</p> <p>(68 大本久美子／2回) 家庭生活における子どもの役割や家族との人間関係を通じた学びや成長について解説する。日本の風土や家族構成などを自国と比較しながらその特徴を見出すグループワークをおこなう。</p> <p>(82 加藤あや子／1回) 自国に伝わる伝承遊びとのリズムなどの違いを感じ、自国との相違などについてグループワークを行う。</p> <p>(83 兼平佳枝／2回) 日本の伝統楽器の一つである箏を通じた創作や音遊びについてワークショップ形式で解説する。箏を使った音楽表現を通して、日本伝統音楽の特徴についてグループディスカッションをしながら考察する。</p> <p>(87 中橋美穂／1回) 遊びと人間関係について解説する。伝承遊びや子どもが創り出す遊びのルール、人間関係づくりなどの特徴を調べるグループワークをおこなう。</p> <p>(73 成実朋子／1回) 児童文学について解説する。作品に描かれた子どもの姿などを通して、日本の児童文学の特徴についてグループディスカッションする。</p> <p>(89 渡邊美香／2回) 造形遊びを通して、子どもの感性や創造力の育ちについて解説する。材料や形、色などを用いて、ことばには依らない作品による子どもの表現の特徴についてグループワークを通して考察する。</p>	オムニバス方式
	日本における教科の内容と指導法(数学)	<p>日本の学校教育における算数・数学科の目標・カリキュラム・指導法・デジタル教科書を含む教科書についての現状と課題を理解する。また、それらを学校現場での現状を取り入れた講義形式でふまえるとともに、その背景となる高度な数学の話題、特に幾何学の話題にも触れ、それを取り入れた上で、異文化の中でも通用する数学教育とはどのようなものであるべきかを考える。さらにデジタル教科書やICTを活用した、今後の数学教育と学習指導要領のあり方について考察する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本における教科の内容と指導法（理科）	日本の理科教育の特徴をレッスンスタディや国際学力調査PISAテストの科学的リテラシーの結果などから理解するとともに、模擬授業やデジタル教科書の活用、探究活動の分析などの実践経験を通して考察する。また、近年、理科教育のトレンドであるSTEM教育の教材開発にグループで取り組みながら、教科等横断的な教育内容についての理解を深め、国際的にも通用するような理科の指導法とはどのようなものであるかを考える。	
	日本型教材の開発と授業デザイン（数学）	日本における教材の開発と授業デザインを理解するために、現行の教科書の比較・分析の方法、授業研究の方法を理解する。またそれをもとに、小中高校の算数・数学科の授業観察を実際に行うとともに、数学研究発表会に参加し、学習指導案の作成ができるようになることを目標とする。指導案は、英語でも「Shidoan」であり、日本独自の文化である。受講生が本講義を学ぶことで、将来、この考え方を各国で広めていけるようになることの一助となることを目指す。 (オムニバス方式／全15回) (70 瀬尾祐貴／8回) 小中高等学校での授業観察や学習指導案の考察を通じ、算数・数学科の教科書の分析や比較をグループワークにより行う。 (86 富永雅／7回) 授業研究に参加し、現場の先生達が教科書をどのように使っているのかを理解し、授業デザインについて考えていく。	オムニバス方式
	日本型教材の開発と授業デザイン（理科）	日本の理科教育で使用されている学習教材および実験教材について歴史的経緯を学び、実際に体験することを通じて、次世代の理科教材とはどのようなものであるべきか、また国際的に通用するような教材とはどのようなものであるべきかを考え、開発に結びつけていく。 授業デザインについては、教科書のレイアウトと学習内容の対応について理解を深め、ICTやデジタル教材を実際に活用した研究授業を行い、各国の教育現場で通用する実践力を習得する。	
	和算に学ぶ日本型数学教育	江戸時代初期に成立した関孝和の名で有名な和算について、中国起源の数学が日本独自の和算にどう発達していったのかを捉える。明治初頭に西洋数学が入ってくるまでは、四則演算から高度な内容まで、庶民に親しまれ、発展を続けた。 本講義では4大数学者（秦九韶、李冶、楊輝、朱世傑）から始まる「近世」が、吉田光由の「塵劫記」にどのような影響を与えたのかを、当時の内容を学び、日本での数学の概念がどのように発展してきたのかを踏まえ学習する。	
	生涯学習としての数理学	日本における数理学教育の成果として、教育産業のみならず、一般企業で働いている人たちの中にも数学を趣味として学習している人が少なからずいる。また、幼児や高齢者の知的好奇心を伸ばす方法として、数理パズルがあげられる。 本講義では、幼児や小学生、そして高齢者が興味を持つような数理パズルに触れるとともに、先端で研究されている数理学の内容にも踏み込み、各国で生涯学習として使えるような数理学の課題や、そこへの向き合い方について学習する。	
	生涯学習としての情報科学	情報通信技術は、急速に発展し続けている。便利になる反面、一定程度のリテラシーを理解していないと犯罪に巻き込まれる可能性もあり、生涯にわたり学習する必要がある。 本講義では、Virtual box 上でOSや基本ソフトウェアなどの環境を構築し、Python、GNU Octave、Scilab などの無料言語を各自の PC にインストールしてプログラミングに触れることにより、将来にわたって、新しい情報技術を躊躇せず取り込むことの重要性を学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (35 守本晃／8回) Octaveを用いたプログラミングを講義するとともに、Scilabをインストールし、Octaveとの比較を行う。 (63 望月久稔／7回) Virtual box、OS(Linux Ubuntu)をインストールし、Linux 環境を整えるとともに、Pythonなどの各種言語を用いたプログラミングの講義を行う。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生涯学習としての自然科学（物理・化学分野）	<p>世界でも競争力を有する日本の工業材料や工業製品の成り立ち、及び動作原理を理解するうえで礎となる自然科学の法則を理解するため、物理と化学の知識は重要である。また、科学技術を応用した製品は時代とともに高機能化し、その理解も常にアップデートする必要がある。</p> <p>本講義では、世界各国で生涯学習の対象となりうる物理・化学の知識、及び最先端の科学・技術について学習する。</p> <p>（オムニバス形式／全15回）</p> <p>（24 辻岡強／4回） 世界の工業製品の開発の歴史と日本の工業製品生産技術の発展、及び現代の主要製品における動作原理と物理学との関係、物理学の技術的な応用について、専門的な解説を行う。</p> <p>（47 喜綿洋人／3回） 物理の基本法則から身近な自然現象が如何にして説明されるのかを具体例を用いて学習していく。特に光に関する現象について学習する。</p> <p>（22 谷敬太／4回） 世界の工業製品の開発の歴史と日本の工業製品生産技術の発展、及び現代の主要製品における有機化学や高分子化学との関係について、専門的な解説を行う。</p> <p>（13 久保埜公二／4回） 工業製品・材料における錯体化学との関係や、物理化学と分析化学の技術的な応用について、専門的な解説を行う。</p>	オムニバス方式
	生涯学習としての自然科学（生命・地学分野）	<p>日本の理科教育の成果として、社会人も広く自然科学の教養を身につけているが、近年の高度な技術的進歩に伴い、最新の科学・技術を学び続け、自然科学分野の知識の幅を広げることは豊かな生活を送る上で重要である。</p> <p>本講義では、各国で生涯学習として使えるような生命科学や地学分野の最先端の知識や課題について学習する。</p> <p>（オムニバス形式／全15回）</p> <p>（18 鈴木剛／5回） 生命科学分野のうち、特に遺伝子組換えとゲノム編集に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での生涯学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p> <p>（7 鶴澤武俊／5回） 生命科学分野のうち、特に微生物の基礎と応用に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での生涯学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p> <p>（15 小西啓之／5回） 地学分野のうち、特に自然災害をもたらす現象の科学的基礎と応用に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での生涯学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p>	オムニバス方式
	数学科教材論	<p>日本の算数・数学教育の教材の中から、幾何教育を中心に、その背景となる数学、教育の歴史の変遷、現在の扱いなどについて理解する。また、諸外国の教科書から、教材とその扱いの比較を通して共通点や相違点を考察し、それぞれの強みや弱みを討論することにより、よりよい教材作りについて考える。教材の実際の扱いについては、小学校・中学校・高校の教員経験者を招くなどし、実践的な手法を講義を通して学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（31 町頭義朗／8回） 日本と諸外国の小中高校における幾何教育について、教員経験者による講義やグループディスカッションを通して学ぶ。</p> <p>（75 柳本朋子／7回） 日本と諸外国の数と計算、関数の教育について、教員経験者による講義やグループディスカッションを通して学ぶ。</p>	オムニバス方式

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	理科教材論	日本の理科教育で使われている教材あるいは実験方法について実践形式で学ぶ。また、世界の自然科学の教科書や教材を比較調査し、共通点や、国ごとに力を入れている単元などを学ぶとともに、それぞれの強みや弱みを考える。日本のSSHで実際に行われている探究型学習や、世界の探究型学習を演習形式で体験するとともに特徴をつかみ、今日の理科教育で重視されている問題解決能力の向上を目標とした次世代の理科教材作りにつなげていく。	
	数理科学教育特論	<p>中学校、高等学校で学ぶ数学の背景には、当然であるが、もっと高度な数学の理論がある。</p> <p>本講義では各担当教員のもと、最先端の数理科学、特に幾何学、代数学、解析学、応用数学の最先端の話題や、日本の中学校、高等学校での数学の内容とのからみを理解するとともに、各国での中学校や高等学校などにおける理数探究型の学習として扱えるような話題について学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(31 町頭義朗／4回) 幾何学教育とその背景をモチーフに、曲線論や曲面論から始め、多様体論へと発展させていく。さらに、幾何学的グラフ理論についても踏み込む。</p> <p>(2 芦野隆一／3回) 応用数学教育とその背景をモチーフに、関数空間をベクトル空間としてとらえ、その内積を用いて、直交関数系やフーリエ級数を学び、フーリエ変換へと結びつけていく。</p> <p>(34 森岡達史／4回) 解析学教育とその背景をモチーフに、初等関数について講義する。初等関数は高校で習う関数が主であるが、様々な定義の仕方をきちんと理解し、相違点について学ぶ。</p> <p>(28 平木彰／4回) 代数学教育とその背景をモチーフに、線型代数学の復習から始め、代数学の基本的な3つの基本的事項である、群論、環論、体論とその応用について学ぶ。</p>	オムニバス方式
	情報科学教育特論	<p>日本の高等学校で学ぶ「情報」の背景には、高度な情報科学の理論があるが、なかなか表面ではそれが見えないくらいがある。</p> <p>本講義では各担当教員のもと、最先端の情報科学、とりわけプログラミングに重点をおき、その話題を理解する。それを踏まえ、日本での「情報」に隠されている高度な理論を探るとともに、各国での中学校や高等学校などにおける理数探究型の学習として扱えるような話題について学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(35 守本晃／5回) ブロックプログラミングの基本から始め、ロボット教材で多角形を描く、速度を学ばせる、チキンレースを行うなどのことが出来るようになり、また、それを他者へ教えることが出来るようになることを目指す。</p> <p>(29 藤田修／5回) eラーニングの現状について学び、支援システムを理解するとともに、設計や試作、運用と評価を行い、将来の動向を探る。</p> <p>(63 望月久稔／5回) 小学校を中心に使われているプログラミング環境 MakeCode を用いて、センサー制御やゲーム制作、教材作成を行う。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	自然科学教育特論 (物理・化学分野)	<p>各担当教員のもと、最先端の物理と化学を中心とした自然科学の話題を理解するとともに、各国での中学校や高等学校などにおける理数探究型（自然科学探究型）の題材として扱えるような話題について学習する。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p> <p>(60 堀一繁／3回) SSH校で実施されている自然科学分野の課題研究を理解させることで、日本の理数探究型学習がどのように進められているかを実践形式で学習し、最先端の有機化学分野の動向について概説する。</p> <p>(22 谷敬太／3回) 最先端の光化学分野の動向を概説するとともに、諸外国の中学校や高等学校における理数探究型（化学分野）の題材として利用可能なものを選択し、学習する。</p> <p>(24 辻岡強／3回) 身の回りにおける先端科学技術機器と物理学との関わり、及びその物理学教育への適用に重点を置き、特にそのような機器を用いた物理学の立場からの手法について探究型学習を行う。</p> <p>(11 川越毅／3回) 物性物理分野の課題研究やそれに関連した必要な知識などを磁性体を題材として学ぶ。最先端の磁性体の種類や応用、その評価方法について学ぶ。</p> <p>(49 串田一雅／3回) 最先端の固体物理学分野の動向を概説するとともに、諸外国の中学校や高等学校における理数探究型（物理分野）の題材として利用可能なものを選択し、学習する。</p>	オムニバス方式
	自然科学教育特論 (生命・地学分野)	<p>各担当教員のもと、最先端の生命科学と地球科学を中心とした自然科学の話題を理解するとともに、各国での中学校や高等学校などにおける理数探究型（自然科学探究型）の学習として扱えるような話題について学習する。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p> <p>(18 鈴木剛・41 乾陽子・61 堀真子／2回) (共同) オリエンテーションならびに振り返りとまとめを行う。</p> <p>(18 鈴木剛／4回) 生命科学分野のうち、特に遺伝子組換えとゲノム編集に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での探究型学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p> <p>(41 乾陽子／5回) 生命科学分野のうち、特に生態学に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での探究型学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p> <p>(61 堀真子／4回) 地球科学分野のうち、特に地球化学の基礎と応用に関して、科学・技術の最新情報を専門的立場から解説し、日本・アジアを中心とした地域での探究型学習における利用を視野に入れた指導を行う。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	数理科学教育特論演習	<p>「数理科学教育特論」で学んだ、中学校や高等学校での理数探究型の学習として扱えるような数理科学の話題について掘り下げていき、各話題について、各国での中学生や高校生がどのように探究を進めていけば一定の成果を得られるのかなどを、演習形式で実践的な学習を行う。</p> <p>また、日本のSSHで行われている数学探究型の学習の内容に踏み込み、どのように発展させていけば良いのかを考える。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(31 町頭義朗／4回) 「数理科学教育特論」で学んだ、曲線論、曲面論、多様体論、幾何学的グラフ理論について、高校生の探究型学習で使えるような話題を見つけ、演習形式で発展させていく。</p> <p>(2 芦野隆一／3回) 「数理科学教育特論」で学んだ直交関数系やフーリエ級数、フーリエ変換について、高校生の探究型学習で使えるような話題を見つけ、演習形式で発展させていく。</p> <p>(34 森岡達史／4回) 「数理科学教育特論」で学んだ初等関数とその応用について、高校生の探究型学習で使えるような話題を見つけ、演習形式で発展させていく。</p> <p>(28 平木彰／4回) 「数理科学教育特論」で学んだ線型代数学や群論、環論、体論、また整数論について、高校生の探究型学習で使えるような話題を見つけ、演習形式で発展させていく。</p>	オムニバス方式
	情報科学教育特論演習	<p>各担当教員のもと、「情報科学教育特論」で学んだ、中学校や高等学校での理数探究型の学習として扱えるような情報科学の話題について掘り下げていき、各話題について各国での中学生や高校生がどのように探究を進めていけば一定の成果を得られるかなど、演習形式で実践的な学習を行う。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p> <p>(35 守本晃／5回) ロボット教材の開発について、情報科学教育特論で学んだことを演習形式で発展させていく。</p> <p>(29 藤田修／5回) eラーニングについて、情報科学教育特論で学んだことを演習形式で発展させていく。</p> <p>(63 望月久穂／5回) プログラミング教材の開発について、情報科学教育特論で学んだMakecodeを用いて演習形式で発展させていく。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	自然科学教育特論演習（物理・化学分野）	<p>「自然科学教育特論（物理・化学分野）」で学んだ、中学校や高等学校での理数探究型の学習として扱えるような物理と化学に関する話題についてより深く掘り下げていくとともに、各話題について各国での中学生や高校生がどのように探究を進めていけば一定の成果を得られるかなど、実践的な学習を行う。</p> <p>（オムニバス形式／全15回）</p> <p>（13 久保埜公二／3回） 化学分野の最先端科学の動向を踏まえた課題研究や化学に関連した理数探究型学習を指導する上で必要な実験的手法やデータ解析方法について実践形式で学ぶ。</p> <p>（11 川越毅／3回） 物理分野の課題研究や物理に関連した理数探究型学習を指導する上で必要な実験的手法やその測定原理について表面物理学を題材として実践形式で学ぶ。</p> <p>（47 喜綿洋人／3回） 最近、自然現象を観測したときに得られたデータの背後に隠された特徴を捉えるために、統計的手法を用いてデータを解析することが盛んに行われている。統計的解析の基本的な方法と実際のデータへの適用方法について具体的にプログラミング言語を用いて実践する。</p> <p>（60 堀一繁／3回） SSH校で実施されている課題研究を紹介するとともに、日本の理数探究型学習がどのように進められているかを実践形式で学習する。さらに理数探究型活動案を作成する。</p> <p>（49 串田一雅／3回） 固体物理学分野の課題研究や固体物理学に関連した理数探究型学習（高等学校物理・現代物理分野）を指導する上で必要な実験的手法やデータ解析方法について実践形式で学ぶ。さらに理数探究型活動案を作成する。</p>	オムニバス方式
	自然科学教育特論演習（生命・地学分野）	<p>「自然科学教育特論（生命科学・地学分野）」で学んだ、中学校や高等学校での理数探究型の学習として扱えるような生命科学と地学に関する話題についてより深く掘り下げていくとともに、各話題について各国での中学生や高校生がどのように探究を進めていけば一定の成果を得られるかなど、実践的な学習を行う。</p> <p>（オムニバス形式／全15回）</p> <p>（15 小西啓之／1回）ガイダンス 探究型学習とは何か、進化する生命科学・地学分野、実験観察の重要性の指導を行う。</p> <p>（7 鶴澤武俊・41 乾陽子／7回）（共同）生命分野 高等学校の理科の教科書に載っている生命科学分野の紹介、実験観察方法・探究型学習内容の指導、教育実践に向けた討論を行う。</p> <p>（15 小西啓之・61 堀真子／7回）（共同）地学分野 高等学校の理科の教科書に載っている地学分野の紹介、実験観察方法・探究型学習内容の指導、教育実践に向けた討論を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
日本語教育支援高度化領域専門科目	日本語教育理解高度化科目	日本語教育の理論と実践	<p>本授業は、国内外の日本語教育事情を踏まえ、目的に応じたコースデザインや授業計画、教材の分析や開発に関わる理論を習得し、教育現場での実践に役立つ知識とスキルの獲得を目的とする。また、日本語教育や異文化理解に関わる授業の分析力や教師としての自己点検能力も身につける。さらに、日本語教育史への理解を深め、現代における日本語教育の社会的意義および責任について考察することを企図する。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p> <p>(榎引祐希子／7回) 国内外の現場のニーズに応じて柔軟にコースデザインや授業計画を考案し、実践に活かせる日本語教育教材の開発を担える教育力を育むために、第二言語としての日本語に関する言語学的な知識や地域差・社会差も含めた多様な日本文化に対する理解を深める。</p> <p>(米澤千昌／6回) 国内外の多様な日本語教育現場について、具体的な事例を基に学習者のニーズや指導方法、その背景にある理論について考察する。また、日本語教育を複言語主義の視点(学習者が有する複数の言語の力の1つとしての日本語)として捉え、日本語教育の今後の発展について議論する。</p> <p>(榎引祐希子・米澤千昌／2回) (共同) 今までの講義の内容を踏まえ、異なる文化的背景を持つ受講生同士で日本語教育をめぐる複数の課題についてグループディスカッションを実施し、課題解決に向けて必要とされる協働力を養う。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
		社会言語学特論	<p>本授業の目的は、言語と社会の関係について理解するための理論と方法(フィールドワーク)を習得することである。具体的には、グローバル化が進展する一方で唯一無二のローカル性を有する【大阪】をフィールドに、「留学生の母語を用いた言語表示」「異文化間のコミュニケーション摩擦」「日本語の地域語(方言)の動態」といったテーマについて、授業で学んだ種々のフィールドワーク(インタビュー、アンケート、参与観察など)を実施する。</p> <p>授業の前半では社会言語学の理論と方法を学び、後半は受講生が大阪でおこなったフィールドワークの成果を発表し、多文化共生の実現・持続を可能にする方略について検討する。さらに、検討内容を母国・出身地に当てはめた場合、どのような課題があり、どのような解決方法がありえるのかという点を考察し、実践的に言語と社会の問題を解決しようとする能力を醸成する。</p>	
		日本語構造論	<p>本授業では、生成文法の基礎を学びながら、日本語の統語構造について学ぶ。学習内容は以下の通りである。：生成文法の基礎、品詞の特徴、格助詞の役割、主な句構造、日本語の語順とかき混ぜ現象、樹形図の書き方と構造的関係、肯定文の構造、従属節の構造、疑問文の構造。また、日本語の構造についての知識をどのように教育へ応用できるのかについて学ぶ。本授業は日本語の構造に興味のある学生を対象に行い、「留学生と日本人等学生の協働」に重点を置く。</p>	講義15時間 演習15時間
対照言語学理解高度化科目	外国語と日本語の対照研究Ⅰ(英語)	<p>本講義では、日本語と英語の様々な側面を比較することにより、2つの言語をよりよく理解し、留学生と日本人等学生の協働も交えながら両言語の運用能力の向上に応用することを目指すと同時に、英語のデータや文献を精読し、言語学的な分析方法の基礎も学ぶ。音声学・音韻論では母音と子音や音のつながり方を比較し、形態論では、派生、複合、品詞転換、主要部の位置などについて比較し、統語論では、文の構造、構文、動詞の分類、主要部の位置などについて比較し、意味論では、語の意味関係、構造と意味、意味役割、動詞の意味などについて比較し、語用論では、発話力、ていねいさなどについて比較する。</p>		
	外国語と日本語の対照研究Ⅱ(中国語)	<p>中国における好調な出版事情を反映して、日本人作家による文学作品の翻訳もまた盛んである。特に人気があるのは、川端康成等、日本の伝統文化を表現したと見なされる、いわゆる純文学の作家であり、『伊豆の踊子』『雪国』等を中心に、複数の中国語訳が刊行されている。そうした状況を受けて中国の大学院では、韓侍桁・葉渭渠・高慧勤といった複数の翻訳者による翻訳と作品の原文との比較対照が盛んに行われている。</p> <p>そこで本授業では、中国語に翻訳された文学作品を取り上げ、原作との比較を行う。その際、先行研究で主流となっている比喩等の表現、翻訳者と原作者とのジェンダー的差異等といった視点に加え、ジュネットの物語論等をよりどころとして、話法・時制といった文体的特徴に着目し、中国語と日本語との差異を考察する。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	外国語と日本語の対照研究Ⅲ（仏語）	<p>フランスでは、フランス語を外国人に教えるプログラムにフランス人が非インド＝ヨーロッパ系の言語を学ぶことが組み込まれている。この点で、フランス語と日本語という全く異なる言語体系の言葉を比較しつつ学ぶことは重要である。</p> <p>本講義では、その一つとしてフランス語における指示詞と定冠詞の使い方と日本語の「この・その・あの」による指示との比較を取り上げる。まず日本語の指示詞について確認した上で、フランス語の指示詞と定冠詞の使い方を学ぶ。さらに留学生の母語との比較を行う。次に村上春樹、夏目漱石、森鷗外の小説における指示詞の使い方に注目し、フランス語訳を参照して「コ・ソ・ア」がどのように訳されているのかを調べる。さらに、フランスからの学部留学生の協力を得つつ、留学生が「コ・ソ・ア」をどのように学ぶのか、また日本人は指示詞と定冠詞をどのように学ぶのかを確認しながら、外国語を学ぶ過程をたどる。</p>	
	外国語と日本語の対照研究Ⅳ（独語）	<p>今日のドイツにおいては、人口の約25パーセント（2018年のデータ）を移民の背景をもつ人々が占めている。さらに年齢別でみると、移民の背景を持つ者の3人に1人は18歳未満の若年層で、学校教育を必要としている。ゆえに、学校は移民・難民の「ドイツ社会への統合」において大きな責任を担っている。</p> <p>実際に、学校現場では移民の背景をもつ子どもたちに、「生活言語としてのドイツ語」に加えて、学校での学びの土台となる「教育言語としてのドイツ語」を習得させるため、「第2言語としてのドイツ語（Deutsch als Zweite Sprache, DAZ）」プログラムを提供している。</p> <p>日本でも昨今外国にルーツを持つ子どもたちが急速に増えており、学校現場はその対応を早急に求められている。そこで、学校における「第2言語としての日本語」教育の示唆とすべく、ドイツにおける「DAZ」の歴史的経緯、現状、今後の課題を取り上げ、考察する。さらに、外国人児童生徒の日本語習得の際に生じる課題を、留学生の母語、文化が及ぼす影響という観点から検討する。</p>	
教科理解高度化科目	国語教育分野 現代文教育の理論と実践	<p>小・中・高の国語教科書を研究対象として取り上げ、収録された教材分析を通して、小説、詩、韻文、評論、随筆等の様々なジャンルの日本語表現を横断しながら、言語表現の可能性を探究するとともに、多様で柔軟な読解力や分析力を養う。</p> <p>さらには、学習指導要領との連関、教科書編集の意図、学習の手引きとして掲げられている発問や課題の意図等を検証することを通して、国語教科書をメタ認知的観点からクリティカルに捉え直し、あるべき現代文教育の方向性や方策を探究する。</p> <p>また、留学生受講者が母国で受けてきた国語教育との比較を通して、比較教育的な観点からの考察も行う。加えて、JSLカリキュラムの考え方を概観し、日本語を第二言語として学ぶ学習者の視点から現代文教育における有効な日本語支援のあり方を模索する。</p>	
	古文教育の理論と実践	<p>留学生並びにこれまで日本古典文学にかかわる機会がなかった学生が、古文を読解するために不可欠な基礎力として、敬語を中心とした古典文法の知識が挙げられる。古典文法は単に知識として暗記するより、基本的な古文を教材として用いながら実践的に習得することが望ましい。したがって、本講義では和歌・歌謡などの韻文教材を読解し、その作品にとってもっともふさわしい現代語訳を模索することにより、古典文法の実践的な習得を目指す。その過程で古典文法を中心とした古文教育の理論を学ぶとともに、その教授法についても身につけることが可能となる。</p> <p>なお、具体的な韻文教材としては『古今和歌集』『新古今和歌集』『和漢朗詠集』『百人一首』『梁塵秘抄』『閑吟集』『宗安小歌集』『隆達節歌謡』『山家鳥虫歌』などから古典文法を学ぶに適した秀歌を選ぶこととする。また、受講者のアクティブラーニングを実現するため、授業は演習形式を基本的とし、それをもとに講評を加える講義形式とする。</p>	講義10時間 演習20時間
	漢文教育の理論と実践	<p>急速にグローバル化の進む現在、漢文教育の中核を占める教材の選定にも一定の工夫が必要である。その一つの試みとして、本授業では、明治の漢文教科書に注目し、現代の教材として再利用できる作品の発掘を目指したい。明治の漢文教科書には、中国古典中心の最近の教科書とは異なり、内容的に「和」「漢」「洋」の三者が混在し、極めてバラエティに富んでいる。例えば、「和」では紫式部の伝記（徳川光圀『大日本史』）、「漢」では義獣譚（馮景「書十義事」）、「洋」ではコロンブスの伝記（安積信「閩龍伝」）など、魅力的な作品が多い。そこで、加藤国安・木村淳編『明治漢文教科書集成』全13巻（不二出版）所収の教科書教材について、日本人等学生（和）と留学生（漢・洋）とが協働してそれらの出典を調査し、訓読・語注・現代語訳を施す作業を通して、明治の漢文教材の可能性を模索する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会科教育分野	現代社会教育の理論と実践	私たちの生活の豊かさをささえる重要な空間である地域と地域社会に注目し、フィールドワークの手法も使用しながら、そこで生じている変化について考察する。地域は人々にとって不可欠の生活空間としてサステナビリティが求められるが、現在地域と地域社会はグローバル化や自然環境問題だけではなく、人口減少や産業構造の変化によっても大きく影響を受けており、多くの課題を抱えている。本授業では、現在、地域と地域社会で生起されている課題について、これまでの公共の中心的担い手であった行政だけではなく、すでに多種多様な役割を果たしている市民や組織の協働に注目し、未来を構想する新しい公共性を手がかりとして検討していく。	
	歴史教育の理論と実践	世界の諸地域における歴史叙述の変遷と歴史教育の変遷を概観する。具体的には、各地域における世界史についての文献を再検討する。史学史に寄与してきたおもな著作を調査し、史学史を議論し、かつ、文献に表れる歴史のパターンを議論する。そのうえで、複数地域について、おもな歴史教科書や歴史教育政策の史料を調査して、歴史教育の歴史を検討し、歴史研究がたどってきた歴史との相互関連性を議論し、比較対照する。史資料の調査を通じて、文書やデジタル化された史料の利用法や文献の読解など、歴史を調査し、教育する際に必要な技術を学ぶ。広域を対象とした歴史叙述ならびに歴史教育を歴史的に考えることにより、グローバルかつ長期的な視点から歴史を分析し論じる力を養う。	
芸術・音楽教育分野	芸術文化教育の理論と実践	世界と日本の社会と文化を理解するために、現代における芸術を通じた教育の理論と実践について、文化現象・社会構造・価値意識という三方面から研究する。芸術文化において異文化受容・適応や異文化コミュニケーションが広く求められている今日では、教育の目的が他者への「理解」にとどまらず、自己に対する「反省」や社会における「共生」に向かわなくてはならない。本演習の受講者は各々、異文化間教育・社会文化能力・普遍的価値理念という観点から厳選された古今東西の美学・芸術学上の古典的なテキストを講読して、必要に応じて美術や音楽のAV資料を用いながら発表を行い、参加者全員による多文化領域を横断する対話と討議を通じて、コミュニケーションの言語運用能力と対人関係能力を養成することになる。	
	音楽文化教育の理論と実践	現生人類は単一の生物種として同一の発声器官をもちつつも、コイサン諸語にみられる音素としての吸着音、イヌイトやアイヌの人びとの声遊びにみられる吸気音の操作、アルタイ山脈周辺の人びとの喉歌における倍音の操作など、実にさまざまな発声とその組織化の方法を築きあげてきた。また、アルメニアなどのヤジューディーやボルネオ島のブナンといった人びとにみられるように、歌唱行動と発話行動は必ずしも単純に対立的・排他的な発声行動の類型というわけではない。こうした多様な声の文化に対する理解を深めるために、民族誌的記述の批判的読解から文化人類学の理論と方法を検討しつつ、学習・伝承のありかたについて考察する。そのうえで、個々の受講者の文化的背景に基づきつつ、多様な発声を実現する身体技法の習得過程の実践とそれをめぐるディスカッションを通して、民族音楽学的異文化理解の実践としての多音楽性獲得の可能性とその方法に関する考察を深める。	
英語教育分野	英米言語文化教育の理論と実践	<p>this class is a teaching practicum. It is an opportunity for aspiring teachers to practice, to hone their craft in front of their peers. It is an intensive teaching practicum for international students and Japanese students alike. Students teach; the class discusses this teaching. Depending upon the number of students, each student will teach every week (except Week 1, Week 8, and the final class). The student-teacher must tell the class:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. topic & level (i. e., JH School, Year 2; High School, Year 3; Juku, etc.) 2. prepare a one-paragraph explanation of the goals of the lesson. <p>Each student-teacher should teach for approximately 10-15 minutes. Following that, the student-teach is evaluated. The class will discuss what the student-teacher did, and will fill out an evaluation form and hand that form to the teacher (Brown).</p> <p><和訳> 本講義では、教育実習の実践を留学生と日本人等学生の協働により、集中的に行う。意欲的な教師として練習し、仲間の前で自分の技術を磨く。毎回受講生が授業を行った後、残りの受講生はその授業について議論する。受講者数によるが、各生徒が毎週教える（1週目、8週目、最終日を除く）。 教師役の学生は、次の点を生徒役の学生に伝える。 1. 内容とレベル（中学校2年生、高校3年生、塾など） 2. レッソンの目標を1パラグラフで説明する。 教師役の学生は、約10～15分間授業を行い、その授業が評価される。教師役の生徒による授業の内容について話し合い、評価フォームに記入し、そのフォームを担当教員に渡す。</p>	講義15時間 演習15時間

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		外国語教育の理論と実践	本講義では、留学生と日本人等学生の協働により、外国語教育の理論と言語学の理論について学び、それらで得た知見を実際の外国語教育と外国語学習の実践に応用する方法を提案する。まず、現在の日本の学校における外国語授業の基盤となる学習指導要領を確認する。その上で、言語理論を英語教育に応用した研究を精読し議論する。内容は、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、認知言語学、SLAと多岐にわたる。さらに、ICTとe-Learningの外国語教育についての実践例を学ぶ。最終的には、以上から得た知見を活用し、英語のReading、Listening、Writing、Speakingの4技能の向上のための効果的な教育方法、学習方法を発表し、議論する。	
多文化理解高度化プログラム	日本語学・日本文学理解高度化プログラム	日本語学実践演習	本授業は、日本語を習得した受講者が「言語変化」という観点から日本語の音韻・音声、文字・表記、文法、語彙の特徴について振り返り、日本語に関する言語学的な知識を教育に還元できる力を育むことを目的とする。同時に、国際社会で活躍できる日本語教師になるために、日本語の通時的・共時的変化について分析できる力の獲得も目指す。これは、日本語に関する教養を深めるだけでなく、日本語教師の責任として国内外における不明朗で不確かな日本語観・日本語史観の拡散を防ぎ、日本語教育全体の質保証に寄与するためである。 授業は基本的に受講生による発表とその後の質疑応答で展開する。授業内容は「音声」「文字」「文法」「語彙」の四部構成にし、受講者はそれぞれのテーマに応じた具体的な事例についての分析と考察を発表する。そして、発表後の議論で導き出された結論を記述するための適切な表現や方法についても検討する。	
		日本近代文学実践演習	本授業では、日本の近現代文学作品を取り上げ、その読解を通して比喻表現、オノマトペ、その他幅広い言語表現の広がりをつかえることで、高度な読解力、表現力、文章力などを養成する。さらには、文学をコミュニケーション論的な観点から捉え直し、コミュニケーションとは何かについての知見を深めるとともに、作者や登場人物についての理解を深めることを多面的な他者理解の一端に位置づける。 このような試みにより、留学生の日本語リテラシーを高度化し、文化現象としての言語という観点から日本語理解を深めることに加え、留学生との協働的な学びを通して、日本人等学生のリテラシー、深い自国文化理解、及び柔軟な異文化理解、高度な思考力、表現力も養う。	
		日本古典文学実践演習	留学生並びにこれまで日本の古典文献にかかわる機会がなかった学生が、古典文学を読解するための基礎力として、変体仮名の読解能力が挙げられる。まずは変体仮名読解能力を養成するための演習を行う。その際には比較的短く、読解しやすい韻文作品を教材として用いることとする。変体仮名が一定程度読解できるようになった段階で、写本や版本をもとに古典文学作品を翻字し、校訂本文を作成したうえで現代語訳を行い、それらをもとに作品の鑑賞にまで発展させることとする。 なお、具体的な教材としては、韻文作品として『古今和歌集』『新古今和歌集』『百人一首』『隆達節歌謡』などを用い、基礎力習得後の教材としては『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』『徒然草』『御伽草子』などから変体仮名を学ぶに適した写本や版本を選ぶこととする。また、受講者のアクティブラーニングを実現するため、授業は演習形式を基本的とし、それをもとに講評を加える講義形式とする。	講義10時間 演習20時間
	ヨーロッパ言語・芸術文化理解高度化プログラム	ヨーロッパ芸術文化実践演習	世界と日本の社会と文化を理解するために、ヘレニズム（古代ギリシア・ローマの哲学思想）とヘブライズム（ユダヤ・キリスト教の宗教思想）とを二大源流とするヨーロッパ芸術文化の歴史を概観しながら、そこに展開された美学・芸術学の体系的な理論および具体的な実践について研究する。本演習の受講者は各々、グローバル化する現代社会における多言語・多文化主義への基本的な視座を確保すべく、ヨーロッパ芸術の諸相に見られる異文化受容・適応や異文化コミュニケーションに関する日・英・独・仏・韓・中いずれかの言語の文献（学術論文）を選んでプレゼンテーションを行い、全員参加によるディスカッションを通して、日本語による受容・理解能力と異文化調整能力を養成することになる。	
	ヨーロッパ言語文化実践演習A	本授業では、今日、自ら「文化都市（Kulturstadt）」と名乗っている都市ライプツィヒの18世紀から19世紀の文化史を取り上げる。とりわけ、音楽史に偉大な足跡を残したヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）、ローベルト・シューマン（1810-1856）とクララ・シューマン（1819-1896）夫妻、そして、フェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809-1847）に着目する。まず、バッハの考察ではその「家族」の歴史に焦点を当て、社会における音楽の位置づけの変遷を明らかにしたい。そして、シューマンおよびメンデルスゾーンに関しては、「ジェンダー研究」の視点から、妻クララ（旧姓ヴィーク）との関係、姉ファニー・ヘンゼル（1805-1847、旧姓メンデルスゾーン）の生涯との比較を通じて、当時の市民社会の音楽に関わる性差を浮き彫りにする。さらに、日本と留学生の出身国の「芸術史」をジェンダーの視点から概観し、ドイツ市民社会の状況と比較検討する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ヨーロッパ言語文化実践演習B	ヨーロッパには、社会的な個人が国家を形成すると捉える国と、公的な領域では個人の持つ文化的・社会的な権利を一旦切り離す国とがある。フランスは後者に当たるが、こうした国にあっては、異なる文化背景を持つ移民に対し、どのような教育がなされてきたのか、また宗教の違いによる食生活や日常生活について、どのように受け止めているのかを考察し、留学生の母国との比較も行う。本講義では、まず20世紀初頭の「フランスへの同化政策」から「自国文化と母語の維持」に至る経緯を学ぶ。次に住民の所得や教育水準が低いと認定されたときに指定を受ける「教育優先地域」の歴史と現状について学ぶ。現在の政府は、教育優先地域とそれ以外の地域との格差を埋めるためにグランゼコールへの優先枠の制定などの措置を取っている。この政策を通じて、そもそもフランスの教育が何を目指しているのかを考察し、教育についての視野を広げた上で、留学生の母国での教育制度と比較する。	
	アジア言語・多文化理解高度化プログラム 国際音楽文化実践演習	東南アジア島嶼部からオセアニア、さらにマダガスカル島まで広範な地域に分布するオーストロネシア語族諸語は、祖語が台湾からフィリピン、インドネシアへと広がり、そこからさらに拡散していったとされる。台湾本島を除く大半の言語はマレー・ポリネシア語派にまとめられ、言語学的にはそれらの変異は台湾におけるバリエーションに比べて小さい。こうした歴史言語学・言語人類学などの知見を参照しつつ、東南アジア島嶼部の音楽文化について、その持続と変容、そして政治性を考察する。特に、多くの地域にみられる「国語」政策のあり方と現実の国語以外の多言語使用の実態との摩擦を踏まえ、音楽・芸能の実態を、留学生と日本人等学生の協働により詳細に検討していくことを通して、「言語集団」とその区分に基づく「音楽文化（伝統）」といった従来の捉え方を再考する。	
	日中近代言語文化実践演習	中国に先駆けて近代化を果たした日本には、章炳麟、梁啓超といった清末の知識人のほか、中国から大量の留学生が来日した。向愷然（不肖生）『留東外史』は、清国留学生の生活を描いた小説である。また日本留学経験を持つ新文学の作家、例えば魯迅、周作人、郭沫若、郁達夫等の日記、回想録からは、日中交流初期の精神史を読み取ることができる。 本授業では、それに続く時代である日中戦争時期の戦争文学作品の中国語訳との比較を通じて、この戦争の日中両国における評価と戦争文学の受容について考察する。先行研究を参考にしつつ、石川達三『生きてゐる兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』の中国語訳を原文と対照し、削除部分等の改変や翻訳の特徴を明らかにした上で、同時代の新聞等に掲載された作品評により、日中両国における評価について調査する。	
	日中古典言語文化実践演習	古典に関わる日中の言語文化交流史の一齣を取り上げ、その思想史的、文学史的、文化史的意味を討論する。具体的には、受講生が、例えば『論語』や『史記』が日本の思想、文学に与えた影響を『十訓抄』『平家物語』などから抽出して考察する発表を行った後、全員で質疑応答、意見交換を行う。『唐詩選』のパロディである大田南畝『通詩選笑知』、馮夢龍『笑府』の影響下にある日本漢文笑話など、通俗文学の交流史や、中国における和歌（『万葉集』『古今和歌集』『小倉百人一首』など）・俳句の翻訳なども、この演習の魅力ある発表テーマと言える。留学生を中心とする受講生がそれぞれの発表、討論を通して、日中の異文化理解の歴史に対する認識を深めることができると考えている。なお、発表に際しては、必要に応じて、関連する外国語（英語・中国語）論文の要約を指示する。	
	国際社会文化理解高度化プログラム 国際知識文化実践演習	知識と社会の影響関係は相互的である。社会の変革が世界観の変化をもたらす一方で、知識の拡大、技術革新は、社会の仕組み、人々の暮らし、日常的なものの考え方、感情に変化をもたらす。本授業では、現在進行しつつあるグローバル化を視野に入れつつ、人やモノの移動、情報流通、翻訳などによる異文化との接触が、広い意味での社会文化にどのような影響を与えるのかを歴史的に検討する。考察の対象としては、1800年前後のドイツ語圏と明治期の日本社会を取り上げる。直接の交渉のない二つの社会を比較することにより、近代化の過程における異文化の意味を構造的に捉える。 本授業は、留学生と日本人等学生の議論の場として活用し、授業参加者は、それぞれの関心に応じたテーマに関する発表を行う（例：孫文の日本留学、世紀末芸術とジャポニズム、中国のイエズス会など）。全体として、討論、質疑応答をくりかえしながら、テーマについての理解を深める。	
国際現代社会文化実践演習	90年代以降、グローバル化が現代社会を読み解くひとつのキーワードとなった。その内容のひとつに人の移動が挙げられるが、現在のところわが国では移民の受け入れはあまり進んでいない。しかし、今後は人口減少にともなって増加していくことが予想されている。したがってこれからは企業内だけでなく地域においても異なる文化や生活習慣を有する移民との協働が求められていくが、グローバル化の視点からは「日本化」の強制ではなく自由と公平を基本とした多文化交流でなければ、グローバル化の積極面が消えてしまう。わが国の移民政策はまだ始まったばかりであり、とくに地域においては模索の段階で多くの課題を抱えているといえる。本授業では、先進的な取り組みをおこなっている組織や自治体の調査をすすめながら、あるべき移民政策、組織運営、そして地域のあり方について検討していく。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際歴史文化実践演習	文化に関連するテーマを選び、広域のかつ歴史的な視点から研究する。衣・食・住、言語、マイノリティ、ジェンダー、宗教などテーマは多岐にわたる。テーマに応じて歴史学だけでなく隣接する学問諸分野の文献を調査、検討して様々な分析の方法と枠組みを学ぶ。そこから地理的範囲や時代設定などの研究枠組みも再検討し、自身の研究に利用可能な方法と枠組みを構築する。他の学問分野の調査を通して、史料の多様な可能性についても考察する。研究を進める際には、文化の歴史的な性格を念頭に置き、文化の生産および変容の過程についての議論を重視する。このようにして歴史的な視点を養い、自文化や他文化を考察する際の種々の問題を認識する力を養う。	
英語・英米文化理解高度化プログラム	日英翻訳論実践演習	<p>This class introduces to international students and Japanese students alike both the theory and practice of translation.</p> <p>At the beginning of the semester, the class looks at 1) what translation is, 2) how to approach it, and 3) basic techniques.</p> <p>First, we consider the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Linguistic and sociocultural knowledge of the Source Language (SL) and comprehensive ability in it 2. Linguistic and sociocultural knowledge of the Target Language (TL) and comprehensive ability in it 3. Transfer Competence 4. Knowledge of the topic and related research skills 5. Knowledge of text types and their conventions 6. Ability to evaluate and discuss translations objectively <p>After that, each class is dedicated to a specific type of language, a specific translation.</p> <p>They include:</p> <ul style="list-style-type: none"> Kinds of Meaning, Ideophones Japanese Causative Kinds of Meaning Simile/Metaphor Ambiguity/Vagueness Tense Relative Clauses, Complex Sentences Equivalence, Adaptation Dynamic Equivalence Clarification, Expansion <p>翻訳に必要な知識や背景を学びながら日本語から英語への翻訳技術の習得を目指す。</p> <p><和訳> 留学生と日本人等学生のため、この講義では、翻訳の理論と実践の両方を紹介する。 学期の初めに、1) 翻訳とは何か、2) どのようにアプローチするか、3) 基本的なテクニックに注目する。</p> <p>まず、以下の点を考慮する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ソース言語 (SL) の言語的および社会文化的知識とその中の包括的な能力 2. ターゲット言語 (TL) の言語的および社会文化的知識とその中の包括的な能力 3. 「移籍」能力 (SL>TL) 4. トピックの知識と関連する研究スキル 5. 本文の種類とその規則に関する知識 6. 翻訳を客観的に評価および議論する能力 <p>次に、特定の種類の言語を用いて、以下の項目を含む特定の翻訳に専念する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 意味の種類、擬情語 日本語の使役動詞 意味の種類 比喩 あいまいさ 時制 関係節、複文 同等性、適応 動的等価 明確化、拡大 	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		国際関係史実践演習	国際関係の歴史は多様な文化・価値を有する協調と対立の過程であり、国際政治の理解に対してさまざまな示唆を与える。そうしたなかで、本講義は国際関係史の演習として、アメリカ合衆国と東アジアの国際関係の変容過程を中心に検討する。グローバルな視野でアメリカ外交史を勉強することの意味、歴史を見る目を養うことを特に目標とする。具体的にアメリカ外交に関する文献資料を解説し、国際関係史にアプローチするための研究方法を学習する。受講者が自ら選んだ文献資料を報告する機会を与えられるので、さまざまな角度からアメリカ合衆国と現代世界との変容を理解する積極的な姿勢が望まれる。	
		自然言語処理実践演習	本授業は言語学習とコンピュータ言語処理の主な課題を紹介する。特に、プログラミングの基礎を学び、コンピュータを利用した語学研究について理解し、説明できるようになることを目標とする。学習内容は以下の通りである：ホームページ作成方法、コーパスを利用すること、コーパスを利用して言語を研究すること、コーパスを作成すること。また、コンピュータ言語処理をどのように教育へ応用できるのかについて学ぶ。本授業は言語学習とコンピュータ言語処理に興味のある学生を対象に行い、「留学生と日本人等学生の協働」に重点を置く。	
	フィールド研究科目	国際協働教育実践演習	学校、日本語学校、その他NPO等の日本語教育・支援に関わる教育現場を実際にインターンシップとして経験し、教育活動に加わることを通して、日本語教員・支援員と学習者との関わり方、日本型教育のあり方などについて理解を深め、実践的指導力の基礎を養う。 また、インターンシップの経験を省察することを通して、日本型教育、日本語教育・支援の現場が直面する課題を理解した上でその解決策を見出す。 さらには、日本型教育、及び日本語教育・支援に対する意欲と将来的な展望を確かなものとする。	
		日本型教育システム開発実践演習	ここまで学習した、日本型の教育システムや最先端の科学・情報・数学を生かし、中学校や高等学校での大学教員による出前授業や、SSH事業の発表会、また、大学での教員免許更新講習や子ども科学実験体験など様々な催しと一緒に参加し、その場で補助を行ったり、場合によっては講義を行うなど、課題解決型の学習について、発展的な演習を行う。最終的にはそれぞれの国で、科学や数学について、どのような催しを行えば良いのかなどを振り返りを通しながら考えていく。	
		日本語教育支援実践演習	事前指導段階では、日本語教育・支援についての具体的な指導計画を作成し、教材作成を含めて、授業や支援を的確かつ効果的に展開するための方法論を学ぶ。それを教壇実習段階につなげ、学校、日本語学校、その他NPO等において、実際に教壇に立つことで実践的かつ高度な教授スキルを養う。 また、事後指導段階では、教壇実習を省察し、課題や反省点の改善策や解決策を見出すことで、日本語教員・支援員としての実践的能力・技能を高める。	
	教育フアンシテーションコース科目	コース共通科目	社会に開かれた教育課程の実践研究	現在、地域学校協働が推進されているが、その中で社会に開かれた教育課程が提唱されており、「総合的な学習の時間」を軸としたカリキュラム・マネジメントに、地域と協働した企画・実践は重要である。 そこで本授業では「総合的な学習の時間」などの授業実践を学び、社会に開かれた教育課程に向けての地域が積極的に協働するカリキュラムの開発力、マネジメント力の向上を図ることを目標とし、学習指導要領についての解説・理解に加え、今日的に学校が求める教育・授業の視点及び、「総合的な学習」の実践記録・実践事例や授業ビデオの分析などを通じて、地域が協働する教育課程の検討を行う。
学習支援特論			学習への動機づけ理論について概観し、人の学習意欲の向上手法について考え、学習への動機づけ研究に基づいた学習支援手法の習得を目指す。また、現代社会における子どもへの支援・指導法に加えて、社会人経験を持つ成人学習者の特性についても学び、成人を対象とした効果的な教育方法・学習支援の在り様について考え、生涯発達論と成人学習論を通じた成人学習者の理解を深める。授業では理論に加え、実際に学習支援に関わる職員をゲストティーチャーとして呼び、支援の実践についても学ぶ。	講義20時間 演習10時間
教育イノベーション		教育ポートフォリオとデータ	デジタル技術の目覚ましい進展により、学校現場では、児童生徒の学びの記録をデータとして蓄積する教育ポートフォリオの活用が広がりつつある状況である。 本授業では、前半は、授業におけるICT活用場面の理解、教育データの種類と特性、教育ポートフォリオを活用した学習と評価の関連性についての専門的知識を学習する。後半は、教育ポートフォリオに集積する教育データの活用により、個人の能力や適性に応じて個別最適化された学びや、効果的な学習指導に向けた実践的な考察を行う。これにより、児童生徒の学びの記録や日常の活用内容の見える化を通じて、効果的な学びや指導方法をデザインするための基盤的知識・技能を習得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
開発領域専門科目	学修評価とデータ	<p>学校現場における現状の評価方法について、先端技術の活用により、効果的な評価手法を導き出すことが可能になることが想定できる。</p> <p>本授業では、学校経営の概説とこれに関わるデータの種類を学び、次のステップとして現状の評価方法の問題点を洗い出し、先端技術の活用により理想とする評価手法を導き出すための考察を行う。これにより、学校現場における現状の評価方法について理解し、先端技術を活用して効果的な評価方法へと改善を図るための知識・技能を習得する。</p>	
	メディア・情報リテラシー特論	<p>デジタル社会が急速に進展する中で、教育現場の様々な情報も膨大な量で蓄積することが考えられる。そこから必要な情報を確実に収集、整理、加工するには、より高度な能力、つまり情報リテラシーが必要となる。</p> <p>本授業では、一般社会でも必要とされるデータの取り扱いに関わるメディアリテラシーから、教育の情報化ならびに、教育現場に特有な機微なデータの取り扱い、ICT機器を使う上で注意すべき事項や関連法規を学び、教育データを活用するための基盤的知識・技能を習得する。</p>	
	人工知能概論	<p>人工知能の基礎的概念と各種技術の応用分野について理解するとともに、歴史的な発展経過や社会に与える影響など、現状の課題と将来動向に関する洞察力を養うことを目標とし、人間の知的能力を人工的な計算機が自律的に自動処理するための様々な数理的な仕組みやアルゴリズムとして、パターン認識、機械学習、ニューラルネットワークなどの基礎を解説し、基本的演習を通して人工知能の長所・短所・限界を具体的に把握させる。また、各種分野におけるデータ科学への応用とその効果や今後の課題について考察する。</p> <p>「先端技術の教育展開と教育データ分析演習とセット」とし、2コマ連続で行う。</p>	講義20時間 演習10時間
	データ分析のためのプログラミング	<p>コンピュータ・プログラミングの基礎的概念を理解するとともに、データ分析に必要な応用ソフトウェアの作成法について実践的な技能を習得することを目標とし、プログラミングの基礎的概念の理解から基本文法の習得、各種ライブラリの活用、データベースの構築、ネットワークの利用、セキュリティ機能の実装、応用ソフトウェアの開発、学習管理システムの運用まで、各受講者のスキルと目標に適した主体的な実践演習を行う。</p>	
	データ解析のための数学概論	<p>データ解析を行うために必要な数学として、統計数学に加えて微分積分学、線型代数学、ベクトル解析、関数解析、微分幾何学、離散数学などが挙げられる。本講義では、平均、分散、相関係数、回帰直線、回帰分析などを理解することを目標とし、そのために使われている多変数関数の微分積分学や線型代数学を主に学ぶとともに、最適化に必要な最小2乗法や線形計画法なども習得する。必要に応じて、ベクトル解析や関数解析、微分幾何学、離散数学とりわけグラフ理論にも踏み込む。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(31 町頭義朗／3回) 平均、分散、共分散、相関係数など、統計数学の基礎や、推定・検定の考え方について講義する。</p> <p>(34 森岡達史／3回) 数列の極限值や関数が連続であることなど、おもに微分積分学や解析学の基礎について講義する。</p> <p>(2 芦野隆一／3回) 無限次元のベクトル空間について講義する。主な内容は、直交関数系、フーリエ級数、フーリエ変換などである。</p> <p>(35 守本晃／3回) 線型または非線型の最適化問題や、最適化問題の分類について講義する。</p> <p>(28 平木彰／3回) ベクトルを用いたデータ解析の考察や、行列を用いた考察、グラフを用いた考察など、線型代数学や離散数学とデータ解析の関係について講義する。</p>	オムニバス方式
	先端技術・データ活用演習	<p>教育現場においては、AIやICT、ビッグデータなどの先端技術をいかに活用するか、または、どのようなデータを獲得して、いかに分析・検証すれば教育・学習効果が最大化するかが課題である。</p> <p>本講義では、企業や社会生活において実装化されているAIやICT等の先端技術や、データ収集と分析を、先進事例やグッドプラクティスに即しながら実践的演習と考察を行う。本演習を通じて、企業等でのデータ分析とマーケティングの視点、先端ICTの動向を理解し、これをベースに、教育現場に適用するための知識と技能を習得する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	先端技術の教育展開と教育データ分析演習	「先端技術・データ活用演習」における実践経験をベースに、AI、ICT等の先端技術を活用した学習プログラムの実証や新たな教室空間の提案、教育データの集積・分析を通じた課題解決など、教育現場の最適化に向けた実践演習を行う。本演習を通じて、先端技術を自在に駆使し、教育に関するデータを集積・分析しながら、各種教育課題に対して最適な解決策を提示するための知識・技能を習得する。 「人工知能概論とセット」とし、2コマ連続で行う。	
地域教育・芸術支援人材高度化領域専門科目	生涯学習推進行政の動向	地域学校協働や地方創生、セーフティーネットとしての学習支援など、生涯学習推進行政の様々な課題について学びつつ、様々な分野・組織と協働（ネットワーク型行政）して問題の解決にあたっていく必要性について理解を深めることを目標とし、中央教育審議会答申などから、なぜ今日、生涯学習推進が先進工業国において重要な政策課題になっているのか、また生涯学習推進の中でどういった分野がどうして重要視されているのかについて学ぶ。さらに社会教育に焦点をあて、特定の自治体をケーススタディの対象として取り上げ、生涯学習推進計画や具体的施策、教育委員会の事務評価などを共同で分析し、評価する。	講義20時間 演習10時間
	生涯学習施設・職員特論	社会の動向及び生涯学習推進政策の動向を踏まえたうえで、公民館、図書館、博物館などの生涯学習施設及びそこで働く職員の役割について理解を深めつつ、優れた実践事例について考察することを目標とする。 生涯学習は人々の生きがいづくりの他に、様々な機能を期待されている。例えば、学校支援や地域の活性化に向けての人材養成、格差社会を防ぐためのセーフティーネット、地域の絆づくりなどがそれに含まれる。そこで、実際に現場となる生涯学習施設及び施設職員に求められる職務及び資質能力とは何かについて考えるとともに、様々な施設で実施されている実践例について学ぶ。	講義10時間 演習20時間
	地域教育とキャリア形成	地域教育の理解と教育支援・教育協働人材としてのキャリア形成を目標とし、受講者が自らの専門領域を核にして、地域社会や教育現場の課題を解決し、価値創造へと導くファシリテーターとして現場を主導していくためのキャリア開発を行う。具体的には、これまでの自身のキャリアを振り返り、省察を深めながら、自己効力とモチベーション、人的ネットワークの構築と維持、問題の把握、リーダーシップ、多職種間連携、男女共同参画等を理解し、地域連携や地域教育の先導者にもとめられる力量を養う。授業の前半部分では、これまでのキャリア形成と学びについて振り返りを行うとともに、各テーマを題材とした文献輪読を行う。後半部分では、事例研究の発表とディスカッションを行いながら問題把握と解決の視点を養い、各自のキャリア・デザインへと展開させる。	講義10時間 演習20時間
	地域教育実践演習	各人が、地域学校協働など他分野との協働を含む自身の事業実践を振り返り、それを報告し、受講者皆で考察することを通じて、自身の実践及び他者の実践から学ぶことを目指す。具体的には事業の発想・アイデア、取組姿勢、企画手法、事業の運営手法、評価手法などの実務的なスキルの向上を図るほか、職業人としての自己の特性に気づいたり、優れた実践例を学ぶことで、生涯教育、社会教育の仕事についての意義を理解したり、あるいは他の受講者から刺激を受け、仕事への意欲の向上を図ることも促す。	
	識字・成人基礎教育実践研究	不登校児童生徒が増え、外国人の渡日者が増えている。そのもとで、識字・日本語学習や、人権学習などを必要とする人が大幅に増加し、それに対する対応が求められている。 本授業では、成人の識字・日本語学習を支援するために必要な知識・スキル・価値観などを習得することを目標とし、そのような人々に関わる現状認識、政策の推移、教育現場の実践と課題などを学ぶ。しきじ・にほんご天王寺をはじめ現場に出向きつつ課題を考え、また、成人基礎教育等について、諸外国の動きも参考に学ぶ。	講義20時間 演習10時間
	地域音楽教育支援研究	多様な教育機関や施設での芸術文化活動の検証を通して、地域における音楽による教育支援活動についての研究を行う。 (オムニバス方式/全15回) (14 神代修・27 中務晴之/9回) (共同) 現在、本学が主催し、大阪府教育委員会、ザ・シンフォニーホールとの共催で実施している大阪府内支援学校の児童生徒のためのコンサート、及び学校現場での芸術鑑賞会等、地域における音楽による障がい者、児童への支援活動を企画・制作し、その効果について検証し、研究を行う。 (12 北川文雄・64 山畑誠/6回) (共同) 地域に開かれた大学として、地域における音楽による教育支援活動を行う意義について考察するとともに、幼・小・中・高等学校等の教育機関や介護施設等において、高いレベルの演奏実践を行うことの教育的効果や芸術文化の役割について検証し、理論的研究を行う。	オムニバス方式・共同

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域美術教育支援研究	<p>未就学児対象の造形教室や造形あそびのワークショップは、地域の子どもの情操を育む場としての役割だけでなく、そこに集う親同士による交流形成の場としても機能しており、これらの活動に対する地域のニーズは非常に高い。</p> <p>本授業では、未就学児対象の造形教室と連携し、幼児や小学校低学年を対象としたワークショップの企画や教材の開発、さらに教室でのワークショップの実践を経験する。本授業における実践を通して、子どもを対象とした美術・造形教育活動の現状や課題、そして地域の子育てコミュニティ形成としての造形ワークショップの意義について理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(44 江藤亮／5回)「デザイン表現と地域教育支援活動」 デザイン表現や映像・メディア表現に関わる地域教育支援活動の事例を収集し考察を進めるだけでなく、アーティストやデザイナーへのインタビューや講演聴講を通して、実践知の習得を目指す。</p> <p>(55 寺島みどり／5回)「絵画表現と地域教育支援活動」 絵画の技法をもとに、地域連携における美術系ワークショップのあり方を、安全な素材や道具、適切な場所づくりといった視点から考え、効果的な実践法を企画する。</p> <p>(52 五明真／5回)「立体造形表現と地域教育支援活動」 発達や情操および環境等、地域の子どもたちは様々な困難を抱えている。子どもたちに対して、立体造形表現領域におけるワークショップによる地域教育支援活動を模索する。実践されている先行研究を調査し、ワークショップにおいて扱う媒体として立体造形表現への発展を企画立案する。</p>	オムニバス方式
	音楽教育支援力高度化演習A	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用なピアノ作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習B	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用なピアノ作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習C	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用な木管楽器作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習D	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用な金管楽器作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習E	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用な弦楽器作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習F	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用な声楽作品の楽曲分析及び演奏解釈の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	
	音楽教育支援力高度化演習G	音楽の専門的な立場から、音楽の役割と音楽教育支援活動が教育現場や様々な施設にもたらす教育的効果を認識し、その活動を主体的に実践し、検証出来る能力を高める。音楽教育支援活動に有用な作品の楽曲分析及び作品創作の研究を行い、その作品による音楽教育支援活動の効果を検証する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	美術教育支援力高度化演習	<p>近年、芸術文化活動による地域創生を目的とした演奏会や芸術祭等が、自治体や地元企業、NPO法人の主導によって数多く開催されている。</p> <p>本授業ではこれまでの授業で習得した様々な芸術教育支援活動に於ける実践知や技術知を活かし、地域の芸術文化振興活動に於いて主導的な立場で芸術文化活動に関与できる能力の育成を「文化芸術に於ける地域連携力の高度化」と位置付け、履修者各自の能力や実践経験に応じて必要な個別指導を実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(55 寺島みどり／5回) 「地域連携力の高度化と絵画表現」 地域の芸術文化振興活動における絵画表現の可能性を個々に掘り下げ、そこから新たな課題を設定し、解決方法を考えるまでのプロセスを個別に指導する。</p> <p>(52 五明真／5回) 「地域連携力の高度化と立体造形表現」 美術教育支援力の高度化として、履修者各自が、これまでに研究してきた地域連携活動や立体造形表現活動を更に発展させ、それらの融合や応用について、様々な地域の芸術文化振興活動や、地域が抱える諸問題を支援し対応できるように研究を進める。</p> <p>(44 江藤亮／5回) 「地域連携力の高度化とデザイン表現」 デザイン表現や映像・メディア表現に関わる地域教育支援活動の実践に必要な専門知識や技術の高度化を目指し、受講生の能力に応じて指導する。</p>	オムニバス方式
健康・安全 教育高度化 領域専門科目	地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅰ	健康管理、健康増進に関する基本的知識を学び、健康の維持増進、保健管理を具体的に実践できるようになることを目標とし、地域・学校における健康課題、特に、健康診断や健康相談の保健管理活動等の現状と問題点について概説する。近年、子どもの抱える健康課題が多様化する中で、養護教諭、学校医、学校薬剤師による専門知識に基づいた効果的な保健指導が重要であり、それらの協働を軸とした健康科学教育について学ぶ。主に学校の健康に関する諸問題を地域でいかに考え、連携・協働して対応すべきかについて学習する。	
	地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅱ	環境保健学をベースとして最適な環境とは何かということをテーマに、特に物理的・化学的環境因子（温度、湿度、空気、水、放射線、化学物質など）が人間の健康に及ぼす影響について考究する。さらに、地域住民や学校保健の対象である児童生徒が健康を保持増進できる環境づくりについて、行政や企業の側から検討を行い、ヘルスプロモーションの理論も取り入れる。 本講義では、院生との意見交換ができる機会も設け、双方向の講義を目指す。	講義25時間 演習5時間
	地域・学校における健康科学教育の理論と方法Ⅲ	今後の社会では、ヒトの心身における健康について教え、学ぶ機会が重要であり、それは地域や学校を対象として創造・提供される。 本講義では、健康科学教育に関する研究活動を中心に、その意義について、特に健康生理学の分野から理解を深める。個人の心身の健康を維持するために、地域や学校で、どのような取組が可能であるか、またその効果をどのように検証するかについて、当該分野の学術研究やデータを読み解きながら、自然科学的な観点から考察する。	講義15時間 演習15時間
	地域・学校における生活環境学教育の理論と方法Ⅰ	超高齢社会、家族構成やライフスタイルの変化、国際化など、社会の進展とともに、住まいを取り巻く生活環境は大きく変化しつつある。 本授業では、地域・学校における生活環境学にかかわって、住生活、住宅計画、まちづくり、居住文化などを中心に、住環境分野に関わる研究理論について知識を深め、現代社会における住まいやまちづくりの課題を考察する。また、地域や学校における生活環境教育の理論を住環境学の面から考えるとともに、安心・安全な住まいづくり・まちづくりを一般市民や児童生徒に伝えるための手法について、演習やディスカッション等も取り入れながら検討する。	講義20時間 演習10時間
	地域・学校における生活環境学教育の理論と方法Ⅱ	地域・学校における食生活環境に関連した諸問題（健康や環境問題、食品のリスクや食の安全性）を科学的に探究する。その中で、科学的根拠に基づいた情報の収集力と分析力を身につけ、問題を解決するために必要な論理的思考法を修得する。そして、各自の研究課題の発展につなげることを目標とする。本授業は、基本的には講義形式であるが、食生活環境学の学習の理解を深めるために、一部グループディスカッションを行う。	講義20時間 演習10時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅰ	<p>「安全 (Safety)」とは、身体的傷害や心理的危険、また物質的危険などにつながるような様々な危険や状態が、個人や地域社会が健康でよい状態であることが保たれるように統制された状態であると考えられている。</p> <p>そこで本授業では、まず「安全」が個人や地域社会が個々の願望を達成する上で必要な日々の生活に不可欠の資源であることについて概説し、その後、家庭・学校・地域・職域における「安全」に関する教育活動の理論と先行研究の成果と内容について受講者間で分担して発表し、得られた知見を基盤とする実効性のある新たな安全教育の構築と展開について考察する。</p>	講義20時間 演習10時間
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅱ	<p>地域・学校・職場における安全教育の問題を取り上げ、心理学の理論的観点から各問題の解決方法を探るとともに、安全教育の実践を行うための基礎的な方法について学ぶことを目標とする。</p> <p>本授業では、始めに授業担当者が過去の実践の問題と関連する理論について概説する。次に受講者が各安全領域（生活、交通、災害）における研究と実践の事例について分担発表を行い、問題点を話し合う。最後に具体的な安全教育場面を想定し、問題を解決するための実践方法に関する具体的な提案にまとめ、成果を発表して共有する。</p>	講義20時間 演習10時間
	地域・学校における安全教育の理論と方法Ⅲ	<p>安全に関する種々の「情報」から見た地域や学校における様々な諸問題について、その現状と課題、解決策を考えていく。取り扱う内容は、学校安全に関わる生活安全、災害安全、交通安全を主なテーマとし、最新の統計データや研究成果を用いて、学校が置かれている現状を把握するとともに、その傾向を捉え、どのような対応策が必要であるかを検討する。また、これら学校の諸問題を地域でどのように考え、連携・協働して対応すべきかについても考察する。</p>	講義20時間 演習10時間
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅰ	<p>東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定以来、日本ではこれまで以上にスポーツへの関心が高まってきた。その一方で、子どもの体力低下や積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化、あるいは体育嫌いやスポーツ嫌いなど、子どものスポーツ活動に関する課題は未だに解決されていない。学校や地域において、子ども達がスポーツをする機会を持ち、スポーツを通して健康で楽しく豊かな人生を歩んでいくことは重要である。そのためにもスポーツ科学の成果を有効に活用することが望まれる。</p> <p>本講義では、スポーツを取り巻く環境及びその重要性を概観し、スポーツ実践に関わる諸問題について見分を広げ、特に、スポーツ科学の活用の実態について学習し理解を深めることを目標とし、スポーツをより楽しく効果的に実践できるようにするために、スポーツ科学の研究成果がスポーツ実践の現場においてどのように活用されているかについて実践事例の紹介を中心に進めていく。</p>	
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅱ	<p>東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定以来、日本ではこれまで以上にスポーツへの関心が高まってきた。その一方で、子どもの体力低下や積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化、あるいは体育嫌いやスポーツ嫌いなど、子どものスポーツ活動に関する課題は未だに解決されていない。学校や地域において、子ども達がスポーツをする機会を持ち、スポーツを通して健康で楽しく豊かな人生を歩んでいくことは重要である。そのためにもスポーツパフォーマンスを高めるための理論と実践は、有効に活用されなければならない。</p> <p>本講義では、スポーツを取り巻く環境及びその重要性を概観し、スポーツ実践に関わる諸問題について見分を広げ、スポーツパフォーマンスの向上に関する理論と実践について学習し理解を深めることを目標とする。特にボールゲームのパフォーマンスを高めるために必要な考え方を理解するために、これまでのスポーツパフォーマンスを向上させるためのトレーニングの歴史、さらにその歴史を踏まえた現状を認識するため、関係する諸科学の成果を紹介しながら授業を進める。</p>	
	地域・学校におけるスポーツ実践の理論と方法Ⅲ	<p>東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定以来、日本ではこれまで以上にスポーツへの関心が高まってきた。その一方で、子どもの体力低下や積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化、あるいは体育嫌いやスポーツ嫌いなど、子どものスポーツ活動に関する課題は未だに解決されていない。学校や地域において、子ども達がスポーツをする機会を持ち、スポーツを通して健康で楽しく豊かな人生を歩んでいくことは重要である。そのためにもスポーツやダンスを同種の人間の身体運動文化であると捉え、新たな身体表現に関する考え方を有効に活用することが望まれる。</p> <p>本講義では、スポーツを取り巻く環境及びその重要性を概観し、スポーツ実践に関わる諸問題について見分を広げ、特に、人間の身体表現の見方、考え方について学習し、理解を深める。人間の身体運動文化であるスポーツ・武道・舞踊に見られる身体表現を舞踊学的分野の研究及び現象学的視点からの研究を踏まえ探究する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅰ	健康科学の課題に関する最新情報について知識を深め、論文作成力を身につけることを目標とし、地域・学校における健康課題、例えば、健康診断や健康相談の保健管理活動等から各自の研究データを解析し、文献を調べ、最新の情報を演習形式で発表し、課題解決のために議論する。地域や学校において子どもが健康課題を理解し、自己管理を行うことが生涯にわたって可能な健康科学教育を実践する。また、問題解決の方法を学び、各自の研究課題に関して、論文指導を行う。	講義5時間 演習25時間
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅱ	本演習では、環境要因がヒトの健康に及ぼす影響と、その予防について国内外の学術論文講読を通して学ぶ。論文講読後、国内外の現状を踏まえて実践的研究に取り組むために、研究テーマの発案、研究計画書や論文の作成の仕方を学んだ上で、地域及び学校における環境がヒトの健康に及ぼす影響について研究を行う。研究を進める途中では、院生間でこの研究の問題点、改善点等についてディスカッションを行い、研究のブラッシュアップも行う。	講義5時間 演習25時間
	健康科学の課題解決のための実践研究Ⅲ	ヒトの心身における健康課題の解決について、適応生理学の視点から考察を行い、学術的な理解を深める。 本講義では自然科学の実験手法を用いて、現代社会における健康科学の問題である肥満や糖尿病などについて、その解決のための実践研究やデータ等を理解する。研究の実施に際し、研究課題の設定と研究手法について、周辺分野の研究論文やデータの検討を行い、研究計画の構築を目標とする。講義では、受講生が研究計画のプレゼンテーションを行い、相互のディベートを通じて、実践研究の学術的価値を論証する。	講義10時間 演習20時間
	生活環境学の課題解決のための実践研究Ⅰ	生活環境学の課題解決のための実践研究の一つとして、地域・学校・家庭における住まい・まちづくり学習を取り上げる。社会教育および学校教育で行われている住まいやまちづくりに関わるセミナーや体験学習などを対象に、その方法論、課題、発展性などを検討する。可能であれば、情報センターやまちづくり関係のNPO、建築士等の専門家団体が開催している一般向けや子ども向けセミナーに参加し、学習教材やプログラム、実施方法の分析を行う。さらに、受講生が住まいやまちづくりに関するテーマの一つを選択し、その課題解決を目的とする教材や学習プログラムを計画し、計画案についてプレゼンテーションとディスカッションを行うことで、理解を深めるとともに研究の視野を広げる。	講義10時間 演習20時間
	生活環境学の課題解決のための実践研究Ⅱ	生活環境学の課題解決のための実践研究の一つとして、食生活および食の安全性を取りあげる。持続可能な開発目標(SDGs)では、飢餓や貧困、環境問題、健康など17の世界共通目標がある。受講者は食の安全性の視点からその解決法を探り、各目標とどのようにつながっているのかを考える。さらに、地域や学校、個人の問題に落としこみ、どう行動すればよいのか具体的な計画案をたてる。また、授業担当者、受講者のファシリテーションのもと、SDGsの達成期限である2030年の食生活について考えるワークショップを考案・設定する内容とする。	講義10時間 演習20時間
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅰ	「セーフティプロモーション(Safety Promotion)」とは、住民が平穏に暮らせるようにするため、事故や暴力及びその結果としての外傷や死亡といった「安全・安心を脅かす要因」を、部門や職種の垣根を越えた協働による科学的に評価可能な介入により予防しようとする取組とそのプロセスのことであると考えられている。 そこで本演習では、受講者が持つセーフティプロモーション活動に関わる課題意識を中心に研究テーマを設定し、対象とした領域(家庭・学校・地域・職域)におけるセーフティプロモーション活動を展開するためのエビデンスを明確にした安全教育プログラムの試案を作成し、そのプログラムの社会実装の可能性と残された課題について受講者間の発表討論を通じて考察を深めていく。	講義5時間 演習25時間
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅱ	地域・学校・職場における安全教育を設計し、実践するためのスキルを習得することを目標とする。具体的には、研究テーマを設定した後に、先行研究の理解、研究計画の立案、教材の作成、学習指導案の作成、ワークシートの作成、評価計画、安全教育の実施、データ分析、結果のまとめと考察、レポート作成という、安全教育の一連の過程を体験することを通して、実践的なスキルを身につける。最後に、受講者相互に学び合いができるように発表会を行い、成果を共有する。	講義5時間 演習25時間
	安全教育学の課題解決のための実践研究Ⅲ	安全教育における授業展開の手法や内容に関する様々な問題点を探し出し、その問題点を課題として捉え、どのような授業展開や内容とするのが現在の安全教育において効果的であるのかを、グループワークや学内フィールドワークを実施しながら解決していく。グループワークでは、各グループにおいて課題を設定し、既往研究や種々の情報を収集・分析しながら解決策を見出していく。学内フィールドワークでは、フィールドでの授業展開手法などを実際に体験し、スキルを向上させていく。	講義5時間 演習25時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅰ	<p>スポーツの指導、トレーニング計画、チームや練習環境のマネジメント、スポーツ医学の支援および指導現場で発生する諸問題等、スポーツ実践の現場で起こる様々な課題とその解決策について学習し、実践に役立てることを目指して理解を深める。特に競技力の向上に関しては、例えばオリンピックや世界選手権に出場する選手など、高い競技力を有する選手ほど、競技力向上を目指すにはスポーツ科学の支援が不可欠になる。</p> <p>本講義では、スポーツに関する諸問題とその解決策について具体的に学習し、競技力向上を目指す際に、どのようにスポーツ科学の支援が貢献しているかについて具体的な事例を調査・研究し、今後のスポーツ実践に役立てることを目指して理解を深める。</p>	講義10時間 演習20時間
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅱ	<p>スポーツの指導、トレーニング計画、チームや練習環境のマネジメント、スポーツ医学の支援および指導現場で発生する諸問題等、スポーツ実践の現場で起こる様々な課題とその解決策について学習し、実践に役立てることを目指して理解を深める。特にコーチングに関する考え方や内容の再構築は近年の大きな課題でもある。</p> <p>本講義では、スポーツに関する諸問題とその解決策について具体的に学習し、競技力向上を目指すコーチに必要な考え方の事例を紹介するとともに具体的な事例を調査、研究し、今後のスポーツ実践に役立てられる考え方やシステムの再検討を目指して理解を深める。</p>	講義10時間 演習20時間
	スポーツ実践の課題解決のための実践研究Ⅲ	<p>スポーツ実践の現場で起こる様々な課題とその解決策について学習し、実践に役立てることを目指して理解を深める。特に人間の身体表現文化であるスポーツ・武道・舞踊に見られるこれまでの考え方を踏まえて身体表現に対する新たな見方や考え方の拡がりについて研究し、身体表現に関する多様な課題と将来的展望も検討することを狙っている。</p>	講義10時間 演習20時間
プロジェクトベース科目	プロジェクト演習A	<p>教員が様々な領域・分野に関わりうる、複数のテーマを設定し、受講学生は、そのテーマにはどのような課題・問題があるかについて、他の学生と討議する。そしてその中で1つの問題に焦点をあて、共同で学習、調査し、研究に取り組む。その過程を通じて、協働して教育的アプローチを用いた課題解決策を開発するうえで必要な資質やスキルを習得し、開発した課題解決策を発表するとともに、それぞれの場での実践につなげていく。</p> <p>(共同方式：5名の教員が全授業回(第1回、第15回を除く)に参加する)</p> <p>(辻岡強・出相泰裕・碓田智子/3回) (共同) 本授業の趣旨を説明し、発表の場において、各領域・分野の専門的な立場から指導・助言を行う。</p> <p>(町頭義朗・守本晃・平木彰・森岡達史・藤田修・芦野隆一・望月久稔・垣本徹/2回) 地域や社会が抱える教育課題の解決について、AI、ICT等の先端技術や教育データを活用した実践研究の指導を行う。</p> <p>(新崎国広・安達智子・高嶺裕樹・中務晴之・稲垣琢磨・北川文雄・神代修・玉井裕子・岡本麻子・山畑誠・江藤亮・五明真・寺島みどり/2回) 地域や社会が抱える教育課題の解決について、地域学校協働や地方創生、福祉教育、キャリア形成などの生涯学習分野、器楽・声楽作品、作品創作による音楽教育支援活動などの音楽表現分野、デザイン表現や絵画表現、立体造形表現などの美術表現分野の立場から実践研究の指導を行う。</p> <p>(永井由美子・松本鉄也・榎木泰介・西川章江・生田泰志・千住真智子・吉田雅行・藤田大輔・豊沢純子・後藤健介/2回) 地域や社会が抱える教育課題の解決について、健康科学教育、生活環境学教育、安全教育、スポーツ実践の立場から実践研究の指導を行う。</p>	オムニバス方式・共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	プロジェクト演習B	<p>社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域の側から学校の授業を開発したり、その他学校が抱える様々な問題の解決に向けて、それぞれの専門性を活かした協働教育プログラムを共同で開発したりするためのアイデアやスキルを習得することを目標とする。</p> <p>学生はどこのプロジェクトに参加してもいいが、基本的に各領域ごとにプロジェクトを設置し、そこでそれぞれの専門性及び実務経験を活かしつつ、他者と協働しながら、学校の授業案や、その他、学校が抱える様々な問題の解決に寄与する協働教育プログラムを開発、発表し、学校や地域での実践につなげていく。ここでは教職大学院とも連携し、教職大学院の学生と共に学校の授業案などを企画したり、彼らを前にして、企画案を発表したりして、現実的に実施可能な案を作成し、実践につなげていく。またここでは教員と地域との相互理解の促進も図られ、教職大学院の学生も社会に開かれた教育課程に向けて、実施主体となる地域側に関して理解を深める。</p> <p>(共同方式：7名の教員が全授業回（第1回、第2回、第15回を除く）に参加する)</p> <p>(田村知子・佐々木靖／15回) (共同) 本授業の趣旨を説明し、グループワークや中間報告、発表の場において、受講学生の進捗状況を確認し、学校現場等の視点から適宜指導・助言を行う。</p> <p>(辻岡強・町頭義朗・守本晃・平木彰・森岡達史・藤田修・芦野隆一・望月久稔・垣本徹／2回) 社会に開かれた教育課程の実現に向けた学校の授業案や教育プログラム開発について、AI、ICT等の先端技術や教育データを活用した実践研究の指導を行う。</p> <p>(出相泰裕・新崎国広・安達智子・高鵜裕樹・中務晴之・稲垣琢磨・北川文雄・神代修・玉井裕子・岡本麻子・山畑誠・江藤亮・五明真・寺島みどり／2回) 社会に開かれた教育課程の実現に向けた学校の授業案や教育プログラム開発について、地域学校協働や地方創生、福祉教育、キャリア形成などの生涯学習分野、器楽・声楽作品、作品創作による音楽教育支援活動などの音楽表現分野、デザイン表現や絵画表現、立体造形表現などの美術表現分野の立場から実践研究の指導を行う。</p> <p>(碓田智子・永井由美子・松本鉄也・榎木泰介・西川章江・生田泰志・千住真智子・吉田雅行・藤田大輔・豊沢純子・後藤健介／2回) 社会に開かれた教育課程の実現に向けた学校の授業案や教育プログラム開発について、健康科学教育、生活環境学教育、安全教育、スポーツ実践の立場から実践研究の指導を行う。</p>	オムニバス方式・共同
課題研究科目	心理・教育支援コース	<p>受講者の研究テーマに即しながら、国内外の基本的な文献講読を中心として、研究動向のレビューをおこない、研究計画を策定する。</p> <p>(6 石橋正浩) 心理アセスメントの技法や活用に関する研究のレビューと国内外の基本文献の講読をおこなう。</p> <p>(54 寺坂明子) 臨床心理学・学校心理学の視点から、主に児童期の情動発達や適応の理解と支援に関する心理学的研究の指導を行う。</p> <p>(40 下村陽一) 研究テーマに基づき、先行研究のレビューを行い、研究計画の立案を行う。</p> <p>(43 岩切昌宏) 主にトラウマに関する研究についてのレビューと文献講読を行う。</p> <p>(65 山口正寛) 主として発達臨床心理学の視点から、国内外の文献レビューをおこない研究計画を策定する。</p> <p>「課題研究I」で策定した研究計画をもとに、担当教員の指導のもとで研究を遂行する。</p> <p>(6 石橋正浩) 各自の進捗状況に合わせて指導をおこない、修士論文を完成させる。</p> <p>(54 寺坂明子) 臨床心理学・学校心理学の視点から、主に児童期の情動発達や適応の理解と支援に関する心理学的研究の指導を行う。</p> <p>(40 下村陽一) 各自のテーマと方法論に基づいて研究を実施し、データ分析を通して修士論文を完成させる。</p> <p>(43 岩切昌宏) 各自のテーマにそって資料を収集し研究を進め、修士論文を完成させる。</p> <p>(65 山口正寛) 主として発達臨床心理学の視点から研究指導をおこない、修士論文を完成させる。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際協働教育コース	課題研究 I	<p>様々な教育課題や教育に関する研究テーマを探究するための研究手法や理論、データ収集・分析方法などを学ぶことを通して、国内外における多様な教育分野で先導的な役割を果たすことのできる高度な専門的研究力や課題解決力を養う。</p> <p>(31 町頭義朗) 幾何学のトピック、主に多様体論を中心とする微分幾何学のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(35 守本晃) プログラミング教育のトピックス、特に「ロボット教材とその活用」から課題を取り上げ、プログラミング教育カリキュラムを作成できるように指導を行う。</p> <p>(24 辻岡強) 日本及び世界の科学技術・工業技術分野で研究開発が進められている有機エレクトロニクスデバイス・材料の基礎物性や応用について、教育分野への活用探究を行う。</p> <p>(13 久保埜公二) 金属錯体に関連する無機化学・物理化学・分析化学のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(22 谷敬太) 有機光化学、および光機能性有機材料のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(18 鈴木剛) 日本の理科教育に関連した植物分子遺伝学の研究分野について、課題研究や専門的探究のための方法論も含めた指導を行う。</p> <p>(15 小西啓之) 気象学のトピック、主に降水物理学を中心とする気象学のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(28 平木彰) 代数学、主に置換群が作用する代数構造の分野から課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(34 森岡達史) 解析学のトピック、主に超局所解析を中心とする偏微分方程式論のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(29 藤田修) 主として機械学習を基盤とする人工知能の基礎と応用に関する課題を取り上げ、数理的な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(2 芦野隆一) ウェーブレット解析を中心とする応用数学の分野から課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(11 川越毅) スピン偏極走査型トンネル顕微鏡・分光法 (STM/STS) による 3 d 遷移金属薄膜の表面電子状態・ナノ磁気構造の観察について指導を行う。</p> <p>(7 鶯澤武俊) 生命科学のトピック、主に原核生物を中心とする微生物学のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(60 堀一繁) 有機化学、および有機機能性材料のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(47 喜綿洋人) 理論物理学、および統計学のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(49 串田一雅) 固体物理学のトピック、主に半導体を中心とする固体物性論のトピックから課題を取り上げ、探究するための研究方法について指導を行う。</p> <p>(41 乾陽子) 各自の修士研究テーマに沿いつつ、生態学の基礎的調査・実験手法として野外生物調査、行動実験、機器分析、実験計画法を網羅的に習得させる。</p> <p>(63 望月久稔) 情報学基礎理論及び知能情報学、プログラミング教育に関する課題を取り上げ、研究方法について指導する。</p> <p>(61 堀真子) 地球内部～表層の物質循環と環境変動に関するテーマで実験プロトコルを考え、組み立てる。</p> <p>(1 赤木登代) ドイツ語圏の文化史および教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(5 石橋紀俊) 日本近現代の文学及び言語文化、国語教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(42 井上直子) フランスの思想研究を中心に、思想の解釈に関する課題を取り上げ、思想の背景、発展を探究するための研究手法について指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(10 亀井一) ヨーロッパ啓蒙主義を中心に、知識の管理、伝播、媒体といったテーマを取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(50 櫛引祐希子) これからの多文化共生社会における日本語・日本語教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(16 佐藤一好) 日中の古典言語文化の比較、漢文教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(17 ト田隆嗣) 音声を中心とするヒトの記号操作に関する文化人類学的な課題を取り上げ探究するための研究手法について指導を行う。</p> <p>(20 高山新) 現代経済社会を対象として、SDGsの17の目標の視点に注目しながら、それにかかわる理論と統計的分析、そしてフィールドワークの手法について指導を行う。</p> <p>(21 瀧一郎) 古今東西の美学理論および芸術教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(57 中野知洋) 中国近代文学の分野に関わる幅広い知識と着眼、問題意識の涵養を目指す。</p> <p>(37 渡邊昭子) 世界史、世界史教育に関するテーマを取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(59 Brown Robert Sanborn) 翻訳や外国語指導方法を中心に翻訳技術や外国語教育方法に関する課題を取り上げ、実践的な体験を通して指導を行う。</p> <p>(48 GINSBURG JASON ROBERT) 言語学（統語論、計算言語学、音韻論、音声学など）を中心に英語（英語の構造、英語と日本語の違い、英語教育）に関する課題を取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(62 馬曉華) アメリカと東アジアの国際関係の変容過程を中心に、アジア系移民に関する課題を取り上げ、複眼的な視点から研究方法について指導を行う。</p> <p>(33 松本マスマ) 「言語の構造と意味」、「日英対照」、「言語学から英文法への応用」を中心に英語、英語学、言語学、英語教育に関する課題を取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(9 小野恭靖) 日本の古典文学作品及び言語文化、国語教育に関する課題を取り上げ、多様な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p>	
	課題研究Ⅱ	<p>課題研究Ⅰで培った専門的研究力や課題解決力、及び修得した研究手法や分析方法などを用いることで、様々な教育課題を新たな観点から解決に導き、国内外で先進的な教育実践を展開していくための成果を修士論文にまとめる。</p> <p>(31 町頭義朗) 課題研究Ⅰで学習した幾何学に関する課題について研究を深め、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(35 守本晃) 課題研究Ⅰで学習した、プログラミング教育のトピックスについて、研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(24 辻岡強) 課題研究Ⅰで探究した有機デバイス・材料に関する探究内容をさらに深化させ、社会・学校教育と関係させて修士論文作成のための指導を行う。</p> <p>(13 久保埜公二) 課題研究Ⅰで学習した金属錯体に関する無機化学・物理化学・分析化学についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(22 谷敬太) 課題研究Ⅰで学習した有機光化学、および光機能性有機材料の課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(18 鈴木剛) 課題研究Ⅰで学習した、植物分子遺伝学分野の課題研究や専門的探究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(15 小西啓之) 課題研究Ⅰで学習した、気象学のトピックについて、課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(28 平木彰) 課題研究Ⅰで学習した代数学に関する課題について研究を深め、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(34 森岡達史) 課題研究Iで学習した解析学に関する課題について研究を深め、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(29 藤田修) 主として機械学習を基盤とする人工知能の基礎と応用に関する研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(2 芦野隆一) 課題研究Iで学習した応用数学に関する課題について研究を深め、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(11 川越毅) スピン偏極走査型トンネル顕微鏡・分光法 (STM/STS) による 3 d 遷移金属薄膜の表面電子状態・ナノ磁気構造の観察の指導を行う。</p> <p>(7 鶴澤武俊) 課題研究 I で学習した、微生物学のトピックについて、課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(60 堀一繁) 課題研究Iで学習した有機化学、および有機機能性材料の課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(47 喜綿洋人) 課題研究Iで学習したトピックについて、課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(49 串田一雅) 課題研究Iで学習した、固体物理学のトピックについて、課題についての研究を深めつつ、修士論文の作成に向けた指導を行う。</p> <p>(41 乾陽子) データ分析やデータ処理を各自の修士研究の結果に実装し、学術論文としての成果発表に耐える成果物の作成を行う。</p> <p>(63 望月久稔) 情報学基礎理論及び知能情報学、プログラミング教育に関する課題について研究を深めながら、修士論文の完成に向けて指導する。</p> <p>(61 堀真子) 地球内部～表層の物質循環と環境変動に関するテーマで自ら組み立てたプロトコルに従い実験し、得られた結果と実際の現象との違いについて考察する。</p> <p>(1 赤木登代) ドイツ語圏の文化史および教育に関する課題について研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(5 石橋紀俊) 日本近現代の文学作品及び言語文化、国語教育に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(42 井上直子) フランスの思想研究を中心に、思想の解釈、思想の背景、発展に関する課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(10 亀井一) 文献学的手法を用いて、知識をめぐる研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(50 櫛引祐希子) これからの多文化共生社会における日本語・日本語教育に関する研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(16 佐藤一好) 日中の古典言語文化の比較、漢文教育に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた実践的な指導を行う。</p> <p>(17 卜田隆嗣) 音声を中心とするヒトの記号操作に関する文化人類学的な課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(20 高山新) SDGsの視点からの現代経済社会の研究を進めながら、新たに発見した課題について研究を深化させながら修士論文の完成へと指導を行う。</p> <p>(21 瀧一郎) 古今東西の美学理論および芸術教育に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた実践的な指導を行う。</p> <p>(57 中野知洋) 修士論文作成という目標を達成するため、中国近代文学の分野に関わる諸問題について、研究手法の習得を目指す。</p> <p>(37 渡邊昭子) 世界史、世界史教育に関する課題についての研究を深め、修士論文の完成に向けて指導を行う。</p> <p>(59 Brown Robert Sanborn) 翻訳技術や外国語教育方法に関する課題についての研究を深めながら、実践的な体験も継続し、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(48 GINSBURG JASON ROBERT) 言語学関連の英語に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(62 馬曉華) アメリカと東アジアとの国際関係に関する文献史料を解読し、国際関係学に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(33 松本マスマ) 英語、英語学、言語学、英語教育に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(9 小野恭靖) 日本の古典文学作品及び言語文化、国語教育に関する課題についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p>	
教育 フ ァ ィ リ テ ィ ョ ン コ ー ス		<p>受講者自らの専門分野や、並行して履修している授業科目から得られた知見を基盤として研究テーマを設定し、本テーマについての文献購読、調査などの研究の推進を通じて、データ収集・分析、文献検索、論文作成等、修士として必要な研究手法を習得する。また、研究の推進により得られた成果は修士論文の執筆につなげるとともに、研究発表を定期的に行う。</p> <p>(35 守本晃) ウェーブレット解析に基づいた信号・画像データの解析方法を習得・応用するための指導を行う。</p> <p>(29 藤田修) 主として機械学習を基盤とする人工知能の基礎と応用に関する課題を取り上げ、数理的な観点から研究するための方法論について指導を行う。</p> <p>(63 望月久稔) 情報学基礎理論及び知能情報学、プログラミング教育に関する課題を取り上げ、研究方法について指導する。</p> <p>(2 芦野隆一) 時間周波数解析を用いて信号・画像データを解析し、データサイエンスに役立てる方法を習得するための指導を行う。</p> <p>(31 町頭義朗) データサイエンスで使われている数理科学、特に幾何学のトピックから課題を取り上げ、研究方法について指導する。</p> <p>(34 森岡達史) データサイエンスで使われている微分方程式などの解析学の内容から課題を取り上げ、研究方法について指導する。</p> <p>(28 平木彰) ネットワーク構築やデータサイエンスに必要なグラフ理論から課題を取り上げ、研究方法について指導する。</p> <p>(24 辻岡強) 中等教育及び高等教育の基礎レベルにおける数物系科目、特に物理学の学習における「つまづき」や「苦手意識」の原因となる思考プロセスについて、ICT技術を用いて解析を行い、それらの解決方法を導くための研究を指導する。</p> <p>(3 安達智子) 心理学、キャリア形成、男女共同参画などに関わる課題を取り上げ探究するための研究手法（文献研究、調査法、面接法）について指導を行う。</p> <p>(38 新崎国広) フィールドワーク（参加観察）及び文献検討に基づいて得られたデータや理論について分析及び検証・考察をするといった研究手法を用いながら、教育支援・教育協働実践並びに福祉教育・ボランティア学習実践に関する研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(53 高銀裕樹) 種々の図書館に関する理念や法制度に関わる課題を取り上げ、探究するための研究手法について指導を行う。</p> <p>(25 出相泰裕) 各人のテーマや研究手法に即した論文を読み進めながら、受講者には定期的に教員が課した研究課題についての発表を行ってもらおう。そこでの助言等を踏まえて、研究内容を深めていく。</p> <p>(27 中務晴之) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、管弦楽分野の課題を中心に取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(14 神代修) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、管弦楽分野の課題を中心に取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(39 稲垣琢磨) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、管弦楽分野の課題を中心に取り上げ、研究手法について指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	課題研究 I	<p>(12 北川文雄) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、音楽作品創作分野の課題を中心に 取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(64 山畑誠) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、ピアノ分野の課題を中心に 取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(46 岡本麻子) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、ピアノ分野の課題を中心に 取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(23 玉井裕子) 地域社会に貢献できる音楽を研究するため、声楽分野の課題を中心に 取り上げ、研究手法について指導を行う。</p> <p>(44 江藤亮) デザイン表現による地域文化創生活動や学校支援活動等をテーマとした 修了研究に必要な資料収集やその分析、また実践活動に関する指導 を行う。</p> <p>(52 五明真) 地域社会や教育施設における立体造形表現に対する諸問題を取り 上げ、立体造形表現や素材を扱う実践活動の課題の研究指導 を行う。</p> <p>(55 寺島みどり) 絵画表現による芸術文化活動や学校支援活動等をテーマとした 修了研究に必要な資料収集やその分析、また実践活動に関する 指導を行う。</p> <p>(32 松本鉄也) 現代社会における健康管理に関わる研究課題を取り上げ、科学的に 探究していくための研究および調査分析手法についての指導 を行う。</p> <p>(26 永井由美子) 公衆衛生学ならびに温熱環境生理学に関する研究課題を取り上げ、 ヒトの健康に関する諸問題を検討し探究するための研究・調査 方法についての指導を行う。</p> <p>(45 榎木泰介) 研究現場における課題解決に向けて、健康生理学的に関する 研究課題を取り上げ、探究するための研究・実験手法について の指導を行なう。</p> <p>(8 碓田智子) 住生活学および居住環境学に関する諸問題と研究課題を取り 上げ、生活科学の観点から探究するための研究・調査方法、 実践研究の手法についての指導を行う。</p> <p>(58 西川章江) 学校や地域を取り巻く食生活環境に関する問題点を取り上げ、 その解決策について科学的根拠に基づいた研究・調査方法 についての指導を行う。</p> <p>(30 藤田大輔) 学校安全の推進を目指した3領域(教育・管理・組織)の活動 を取り上げ、セーフティプロモーションスクールの社会実装 に関わる課題の研究指導を行う。</p> <p>(56 豊沢純子) 安全行動に関わる研究課題を取り上げ、探究するための研究・ 調査分析手法についての指導を行う。</p> <p>(51 後藤健介) 安全教育に関わる事象について、情報収集やフィールドワーク を通して得られた「情報」を地図などで「可視化」し、課題 解決に繋げるための研究指導を行う。</p> <p>(4 生田泰志) スポーツ科学に関する研究課題を取り上げ、探究するための 研究・調査方法についての指導を行う。</p> <p>(36 吉田雅行) スポーツコーチングに関する研究課題を取り上げ、探究する ための研究・調査方法についての指導を行う。</p> <p>(19 千住真智子) 身体運動文化に関する研究課題を取り上げ、探究するた めの研究・調査方法についての指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	課題研究 II	<p>課題研究 I で培った知見や研究手法を用いて、受講者自らが設定したテーマに即した研究を一層深めつつ、これにより得られた成果を修士論文としてまとめる。受講生には修士論文の執筆につながる課題を提示し、定期的な研究発表とそれに対する指導や助言を行うことで授業を進める。</p> <p>(35 守本晃) 課題研究 I で学習した、信号・画像データ解析についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(29 藤田修) 主として機械学習を基盤とする人工知能の基礎と応用に関する研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(63 望月久稔) 情報学基礎理論及び知能情報学、プログラミング教育に関する課題について研究を深めながら、修士論文の完成に向けて指導する。</p> <p>(2 芦野隆一) 課題研究 I で学習した、時間周波数解析についての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(31 町頭義朗) 課題研究 I で学習した、幾何学のトピックについての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(34 森岡達史) 課題研究 I で学習した、解析学のトピックについての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(28 平木彰) 課題研究 I で学習した、代数学とくにグラフ理論のトピックについての研究を深めながら、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(24 辻岡強) 課題研究 I の結果に基づき、数物系科目のAI活用した個別最適化学習のためのコンテンツの研究を行い、修士論文完成に向けた指導を行う。</p> <p>(3 安達智子) 調査や面接によって得られたデータの分析を通して、心理学に関する研究課題を深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(38 新崎国広) フィールドワーク(参加観察)及び文献検討に基づいて得られたデータや理論について分析及び検証・考察をするといった研究手法を用いながら、教育支援・教育協働実践並びに福祉教育・ボランティア学習実践に関する研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(53 高嶽裕樹) 生涯教育学、図書館情報学などの研究手法を用い、特に生涯教育施設の社会制度的側面に関する研究課題についての検討を深めながら、修士論文の完成にむけた指導を行う。</p> <p>(25 出相泰裕) 各人のテーマや研究手法に即した論文を読み進めながら、受講者には定期的に教員が課した研究課題についての発表してもらい、修士論文の進捗を図っていく。</p> <p>(27 中務晴之) 地域社会に貢献できる音楽を研究するための管弦楽分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(14 神代修) 地域社会に貢献できる音楽を研究するための管弦楽分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(39 稲垣琢磨) 地域社会に貢献できる音楽を研究するための管弦楽分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(12 北川文雄) 地域社会に貢献できる音楽を研究するための音楽作品創作分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(64 山畑誠) 地域社会に貢献できる音楽を研究するためのピアノ分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(46 岡本麻子) 地域社会に貢献できる音楽を研究するためのピアノ分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(23 玉井裕子) 地域社会に貢献できる音楽を研究するための声楽分野の研究課題を発展させ、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(44 江藤亮) 「課題研究 I」における資料分析や実践活動の成果を踏まえ、デザイン表現による地域文化創生活動や学校支援活動等をテーマとした修士論文の執筆に向けた指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(52 五明真) 「課題研究Ⅰ」において明瞭化した、地域社会や教育施設における立体造形表現に対する諸問題を取り上げ、立体造形表現や素材を扱う実践活動の課題の研究指導を行う。</p> <p>(55 寺島みどり) 「課題研究Ⅰ」における資料分析や実践活動の成果を踏まえ、絵画表現による地域文化創生活動や学校支援活動等をテーマとした修士論文の執筆に向けた指導を行う。</p> <p>(32 松本鉄也) 健康管理学に関する研究手法を用いて、地域における健康の諸問題を科学的に分析・検討し、修士論文の完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(26 永井由美子) 公衆衛生学ならびに温熱環境生理学に関する研究手法を用いて、ヒトの健康に関する諸問題を分析・検討し、修士論文の完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(45 榎木泰介) 研究現場で得られたデータを分析・解析し、研究課題の科学的解決を深めるとともに、修士論文の完成に向けて、健康生理学的な観点から研究指導を行なう。</p> <p>(8 確田智子) 住生活学および居住環境学に関する研究手法を用い、住宅および住生活にかかわる諸問題を科学的に分析・検討し、修論完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(58 西川章江) 食生活環境学に関する研究手法を用いて、学校や地域を取り巻く食生活環境に関する諸問題を科学的に分析し、修論完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(30 藤田大輔) セーフティプロモーションスクールの社会実装に関わる研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(56 豊沢純子) 安全行動学の研究手法を用いて、行動安全に関わる課題を科学的に分析・検討し、修士論文の完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>(51 後藤健介) 修士論文完成に向けて、様々な解析手法の中から最適な手法を選び、プログラミング的思考によって解決していく研究の組み立て方について研究指導を行う。</p> <p>(4 生田泰志) スポーツ科学に関する研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた研究指導を行う。</p> <p>(36 吉田雅行) スポーツコーチングに関する研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた研究指導を行う。</p> <p>(19 千住真智子) 身体運動文化に関する研究課題についての検討を進展し深めながら、修士論文の完成にむけた研究指導を行う。</p>	

補足資料 国立大学法人大阪教育大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
大阪教育大学				大阪教育大学				
教育学部				教育学部				
初等教育教員養成課程	60	-	240	初等教育教員養成課程	60	-	240	
		3年次				3年次		
初等教育教員養成課程(夜間)	40	25	275	初等教育教員養成課程(夜間)	40	25	275	
学校教育教員養成課程	420	-	1,680	学校教育教員養成課程	420	-	1,680	
養護教諭養成課程	30	-	120	養護教諭養成課程	30	-	120	
教育協働学科	350	-	1,400	教育協働学科	350	-	1,400	
計	900	25	3,715	計	900	25	3,715	
大学院教育学研究科				大学院教育学研究科				
健康科学専攻	21	-	42		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
総合基礎科学専攻	16	-	32		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
国際文化専攻	12	-	24		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
芸術文化専攻	12	-	24		0	-	0	令和3年4月学生募集停止
大学院連合教職実践研究科				大学院連合教職実践研究科				
高度教職開発専攻	150		300	高度教育支援開発専攻	50	-	100	研究科の専攻の設置(事前伺い)
計	211		422	高度教職開発専攻	150	-	300	
				計	200		400	